
SILVER BLITZ

笹塚諒兵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SILVER BLITZ

【Nコード】

N1373W

【作者名】

笹塚諒兵

【あらすじ】

「生き残りたければ、戦いなさい」少女、月波綾乃は言った。いきなりことで混乱する中、奴等魔術師 シルバーブリッツは襲い掛かって来る。いきなり非現実的世界へ招かれた少年、緋之聖は綾乃に「クズ」と呼ばれながらも仲間達と戦うことを強いられた。己もまたシルバーブリッツとして、高校の偏差値を守るために渋々と立ち上がったのだ。高校の偏差値は学力を指すものではない。裏で戦うシルバーブリッツの魔術戦力を表すもので、それで生徒や高校の生活が決まるのだから………！

月が似合う少女　？（前書き）

「クズ」と少女は罵倒する。「戦いなさい」と少女は無理強いをする。なぜなのか何の理由があつてのことなのか。一切が謎に包まれたまま少年はそこに立つ。

暗闇の中で襲い掛かる魔法。少年は命というカードを抱えて闇を走る。

月が似合う少女？

こうなった理由。それは言葉では決して表し切れないような、例え言葉で表せてもそこまで簡潔に説明できるものではない。

平常な生活を送って来た自分にとって、この事態は理解し難いものとなっていた。

なぜ人々は僕を襲うのだろう。何度も自問するも自答する術がない。

「はあ、はあ……くっ！」

全速力で疾走する途中で振り返る。追手はない。

薄暗い密林を走るのは辛い。時間的にも夕方を過ぎてしまったため、日光が山で隠れてしまつて光源を失ってしまった。

唯一の光源である月の光も、あの薄暗い分厚い雲に覆われてしまつては七割も役に立たない。仕方なく闇に紛れ、姿を眩ませようとしたが、相手の術の前では天候による闇も意味を持たない。

戦況ははつきりと言うと、最悪だった。仲間による救援はあまり望めない。この事態を自分で解決せよと戦場に無理矢理おくりこんだのだ。

すると、背後に気配がした。すぐにその場で横に飛ぶ。次の瞬間、今まで自分がいた場所を何かが物凄い速度で通り過ぎる。

熱い塊だった。火の玉だ。本当に燃えているのだ。それが襲い掛かって来る。大きさはサッカーボールくらいだが、威力は計り知れないものだった。何しろ燃えているのだ。

その燃えるサッカーボールが掠った木の葉に火が移り、その場をボオと照らす。

「くっそう」

素早く脚を振るう。濡れた土を少しだけ巻き上げる。クリーンヒット。他の葉に燃え移る前に火を消した。

「最悪だよまったく。」

月波さんめ。話が違つよ」

文句を呟くが、すぐに黙る。

すぐそばでガサガサと草の揺れる音がしたからだ。相手が近づいてきたのだ。

先程の燃える球もこの相手が撃つて来たのだ。なので警戒しなければならぬ。横に跳んだついでに太い木の裏に跳び込んで隠れた。少し顔を出して探ると、相手の姿が見えた。灰色のローブを被った長身の男だった。

そう。この男は魔法使いなのだ。

現実世界を生きる僕にとって、魔法という非現実的な存在は、まったくもつての幻想でしかない。

語れば馬鹿にされ、信じられない顔をされる。

そんなものと割り切っていた。

だが今僕の目の前にある現実では、まるで金銭の交換のように魔法が使用され、応酬のように飛び交っている。いきなりそんな場所にポイと放りだされたのだ。

最初は混乱した。違う。今もだった。なぜこんな場所に放りだされなくてはならないのだろうか。そして隣に立つ少女は言った。

「生き残りたければ、戦いなさい」

少女は小柄で、華奢で、綺麗だった。見知った少女だった。同じ高校、同じクラスの月波綾乃。あまりクラスの同級生と交流をしながらない不思議な少女だったが、不思議と孤立はしなかった。

黒い髪はセミロングに。緑色のカチューシャをして、前髪を固定している。前髪は左側だけ長めに固定していて、目を薄く隠していた。

勿論自分とも交流はない。話した事無い。なのになぜかその少女、綾乃にこの世界に連れて来られ「戦いなさい」と命令された。

咄然として綾乃を見てみると、綾乃は上着のポケットから何かを取り出した。一つは腕輪。その他は五枚のカードだった。腕輪は西洋の装飾を思わせる文様が刻まれていた。銀色の腕輪を迷いなく左手に填めると、綾乃を五枚のカードを一枚ずつ手に取り、これも迷いなく一枚ずつ引き裂いた。

驚いてその光景を見詰めていると、作業が終わってやつと思い出したかのように目の前で咄然とする少年を、まるで汚いものを見つけたかのような表情で見つめ、別のポケットから同じ腕輪を取り出して投げて寄越した。

「それを填めなさい。……………あとこれ。今見た通り、一枚を縦と横に一回ずつ破いて、四枚を重ねて腕輪の穴に翳して。それが貴方の武器になるから」

「は？ 武器ってなんのことなの？」

「一々説明しないと解らないの？ 面倒くさい。なんで小泉は今日に限って休みなのかしら。不愉快極まりないわね。」

あ、カードね。……………ああ、貴方に最悪な通告があるわ。持ち合わせのカードがこれしかないの。でも初めから魔法は辛いでしょうね」「魔法だつて？」

再び咄然としている自分に、綾乃は一枚のカードを投げようと手を上げ

しかし渡せないと判断したのか、歩いて頭上

からカードを落とした。

座っているの、綾乃の顔が頭上にある。膝に落ちたカードを拾い上げた。それはまるでカードゲームにあるような絵の、カードだった。文字を読み取る。

「アーツ？」

「そう。私達は普段使わないから、残っちゃうのよね。接近戦だなんて、そんなことしないもの。私達魔法使いにはね」

「魔法使い？」

「シルバールイツ。私達の総称よ。魔法使いは古くから私達はそう呼んでる。で、そのアーツも魔法だけど接近戦用の魔法よ。使ってみれば解るから。とりあえず一時間生き残って。そうすれば私がどうにかするから」

「え、ちょ……………」

慌てて引きとめようと手を伸ばした時。その表情が激しく豹変した。

そして一言、こう言ったのだ。

「生き残りたければ戦いなさいって言ってんのよ。このクズ」

そう言い残すと、綾乃はその場を去ってしまった。最後まで不思議な少女だった。いや、不思議というよりも暴言を吐いた方が気になるが。

そして事は起こる。

啞然としてから二分が経過した頃だろう。まだアーツと呼ばれたカードを見つめていると、一人の人間の気配がした。これは殺気だと解った。強い殺気だったので、誰でも解る。

「あの人に事情を話せば、解ってもらえるかな……………」

殺気立っている人間にどこまで話を通じるかと思った。多分無理だろうな。と思う。あれだけ殺気をむき出しにしている人はまともに話をする感情を忘れている可能性が高い。

「あのー………… 僕の話聞いてもらえますか？」

「フー、フー！」

「日本語、通じますか？」

「フー、ゴー」

「駄目だこりゃ

は？」

声を上げた。当然だった。殺気立っている相手の左手が光ったと思ったら、次の瞬間に背後で爆発が起きたのだ。

訳が解らなかった。それだけの動作で、これだけの爆発がおこるのだろうか。

もしかしたらドッキリで、これも仕組まれた爆薬の爆発にるもので、相手の腕が服のどこかに取り付けてあったライトを光らせただけなのではないか。

さらに混乱する頭をかかえる。ドッキリにしてはまだ背後で燃え盛る炎は消えない。『ドッキリだよ〜ん』と誰かがプラカードを持って来てネタばらしをしないのか。

もしかしたら、これがさっき彼女が言っていた魔法なのか。

だとしたら自分の身が危ない。戦えと命じたのだ。つまり戦場に放り込まれたのだ。理由もなく。

こうして僕、新城聖の戦いが幕を開けたのだ。

大体の仕組みは理解した。

あれから必死の回避と逃避で灰色ローブの男性から距離を開き、観察と綾乃が残した言葉をワードに整理を進める。

「これが こうなって」

綾乃に渡された腕輪を左腕に填める。意外としつかりとフィットした。次にカードを破く。まずは横に一回破き、重ねて縦に破く。

「うわっ」

背後で激しい振動を感じる。頬に熱を感じた。灰色ローブが迫っている。

その場でローリングをして少し距離を取り、身を低くして滑るように動く。時間帯は夜に近い。闇が訪れようとしていた。

音をなるべく消して次の木の陰に隠れる。

腕輪を見た。穴が五つある。その右に破いたカードを添えた。

不思議な感触だった。今まで紙だった物体が硬く膨らむ。一センチほどの珠になる。灰色だった。その灰色の珠がしつかりと穴に填った。

「これが、アーツ……？」

だがそれだけだ。何も起こらない。灰色ローブの男がどうやって

炎の球を撃ちだしてくる仕組みも解らないまま、必死に攻撃を避け続けるのだ。

そして今にあたる。逃げ続けてすでに三十分以上は経っているだろう。それでも攻撃を避け続けた。

辺りはもう暗い。日が殆ど落ちて森林に闇が訪れる。そんな闇の中で闇雲に転げ回った。唯一の光源はまだ沈んでいない夕陽と相手の炎攻撃によるものだけだった。

そろそろ体力的にも限界が近い。それでも灰色ローブの男は攻撃を緩めることはなく、音のした方へ炎を放って来る。回避するのが精一杯だった。だがそろそろ夕日が落ちる。そこで決着をつけたいと思っていた。チャンスは一度。相手がまだ信じられないが魔法の類いを使って攻撃してくるのだ。千載一遇のチャンスだろう。奇跡は自分の手で捻りだすまでだ。

「いい加減にしとけよ。あまり僕を舐めないほうがいい」

聞かれない程度の音量で呟き、背後の木の枝を掴んで地面を蹴った。

S I L V E R B L I T Z

「フー！　ゴー！　どこだ……」

初めて灰色ローブの人語を聞いた。今まで荒い鼻息しか聞こえなかったから、喋れないのだろうと思った。そして驚く事にそれは明

らかに日本語だった。

足元でガサガサと音がする。焼けて焦げた草や木の根を踏み荒らす音だ。あまりの音量の大きさに、この男がとても強い殺気を秘めていることが解る。失敗すれば確実に死ぬだろう。

だがここで死ぬ気は無い。一体どういうことなのか綾乃に問うためだ。そのためにも灰色ロープの男を倒さなければならぬ。殺すとは言わないが、最低でも腕の骨を折って、その後気絶してもらうしかない。困難だと解っている。だがこれ以外に方法はないのだ。

そして灰色ロープの男の背後で、ガサツと音がした。灰色ロープの男が音源ではない。別の、ターゲットの足音でしかなく

「そこかあつ！！」

灰色ロープの音が持っていたステッキが背後へと向けられ、次の瞬間ステッキの先から炎が出現し、形を成す間もなく射出された。ゴオツと空気を燃やすそれは、灰色ロープの男の背後一面を燃やした。

そして灰色ロープの男が勝利を確信し、唇の端を嚙猛に釣り上げた瞬間

「そこまでにしてもらおうか」

ボキツと折れる音がする。灰色ロープの男の右腕、そしてその先にあるステッキだ。

一瞬のことで何が起きたのか未だに理解できていない灰色ロープの男は、本来ならそこまで曲がらないはずの腕を見て茫然とし、やがて遅れてやってきた激痛に汚く表情を歪めながら膝を突き、肺の中の空気を砲弾のように撃ちだすかのごとく、絶叫を上げた。

「ぎゃああああああああああ！ お、俺の……俺の、う、腕が！ 痛い、痛えよおっ」

左腕で右腕を抑え、堪えられなくなった涙腺から涙がダムの決壊のように溢れ出た。

一方奇襲に成功した少年は、男の手からステッキを奪い取り、完全に真つ二つにして遠くへ放り投げた。そして男が無力化したことを確認し、拾い上げた先の尖っている木の枝を拾い上げて突き付ける。

「答えてくれませんか？ 何で僕が襲われなくちゃならないんです？」

「あ、あつ、ああつぐ……いでえ、いでえよお！」

灰色ローブの男は少年の質問に答えず、只管悲鳴を上げ続けた。

このままでは埒が明かない。しかし腕を折ってしまったのも事実だ。罪悪感があったが、殺されそうになったのだ。正当防衛は通じるだろう。

なので、

「答えてください！」

ズンと灰色ローブの男の目の前に、ついさっきその腕を折った右膝を振り降ろした。

奇襲は成功した。一瞬のことだった。

木の上に登り、なるべく気配を消して灰色ローブの男が接近してくるのを待つ。そして通りかかった時に予め拾っておいた小石を男の背後に落とす。すると男は弾かれたように炎を射出するので、その仕組みを理解して木の上から飛び降りた。男の右腕を掴み、一気

に右膝を肘に打ち落とした。関節をきめていたので重力と落下速度と体重を乗せれば腕は簡単に折れる。そして左足を伸ばしてステッキを勢い良く踏み付ける。腕と地面が接触したので、重圧に耐えられなくなったステッキは簡単に折れる。木製だった。

灰色ローブの男は目の前に迫る少年の膝を見て、悲鳴を押し殺した。

「何であなたは僕を殺そうとしたんですか？ 答えてもらわないと、次は左です」

木の枝で灰色ローブの男の左腕を叩く。大抵はそれだけで怯える。その後は残った左腕を折られたくないがために従順に質問に応える。そう思っていた。

だが間違っていた。この少年は選択は間違っていたのだ。

「お前が俺の腕を折ったのか？」

突然、灰色ローブの男の口調が静かになった。痛みなど忘れているかのような無表情。まるで波一つない海のような、闇で支配された海の底のような。

「俺の腕を折りやがったのか……………」

最後だけ絞るかのような小さな声になった。そこでやっと少年は間違いに気付いた。

「やっばお前、殺すわ」

腕を折っただけでは、この魔法使いは止められないということだ。今まで右腕を押さえていた左手が、左腕を叩いていた木の枝に触

れる。

そして木の枝は一瞬で炎上したのだ。

「何っ!？」

炎を出現させていたのはあのスティッキではなかったのだ。見れば男の左腕にも少年と同じ腕輪が填められており、五つの穴の中心の赤い珠が光っていた。

魔法を出現させる源は、この左腕に填められた腕輪だったのだ。いきなり燃えた木の枝を手放し、急いでステップを踏んで後退する。

「もう逃がさねえよ」

灰色ローブの男は左腕を上げ、左手でバンと地面を叩く。すると左手から炎が出現し、枯れ葉や炭となった木の根を伝って炎が走り、少年を追いかけた。

まさかこういう方法で追跡を行うとは思っていなかったので、ステップを大幅にして倍の速度で退避する。それでも間に合わない。確か少年の背後には太い樹があったはずだ。ステップを中断して振り向かずに走る。ギリギリで炎の手から逃れ、樹の裏に跳び込むことに成功した。

だが安堵するのはまだ早かった。その太い樹も数秒で火が回り、崩れてしまったのだ。なんとという火力だと恐れ驚愕したものの、逃げる脚は止めない。さらに走る速度を上げたのだが、地面から噴き上がる炎はまだ追いかけてくる。このままではやがて捕まり、今まで踊るように回避し続けて盾にした木のように、炭になってしまうだろう。

「くっそう!」

毒づいて後を振り返る。灰色ローブの男が追ってきた。このままでは追いつかれる。

そして炭になって死ぬのだ。短い人生だったかな。と人生が走馬灯のように脳裏に浮かび上がる。流れる映像に気を取られ手続けていたので、足元で大きく盛り上がったような太い木の根に気付かず、思い切り蹴飛ばして大きく蹴躓いてしまう。

「うぐ………痛え」

いきなりのことだったので情報整理がうまくいかない。湿った土に思い切りヘッドスライディングしてしまったので、顔面は薄汚れていた。口腔にも土の生臭く苦い味が広がっていた。顎と頬がひりひりと痛む。どうやら今ので擦り剥いてしまったようだ。

早く逃げないと。やっと終えた情報整理の後にそれを思い出して、後ろを振り向く。

全身に鳥肌が立った。

「やっと捕まえたぜえ」

まるで危険な薬物をきめたかのような危ない表情。口元は涎で汚れ、双の瞳が血走っている。

そして灰色ローブは男の左腕にまで広がった炎で焼けて剥がれるように落ちる。それでも構わず男は、目の前にいる獲物を見下ろした。

これは死ぬな。それが素直な感想。間違っではないだろう。まさか魔法使いを相手にするとは思っていなかった。でもこの生涯で一度ならず何度でも魔法を見れたのだ。貴重な体験をしたかな。と思いつつ、目を瞑る。体と心はすでに諦めていたようで、もう力が入

らない。魔法使い相手によくやった方だと思う。何しろ右腕を押し折ってやったのだ。一矢報いてやったのだから誇らしいと思う。入った部活の部長がこれを見たらどう思うだろう。絶対に褒めてくれるだろう。

ただ一つ気がかりなのは、この戦い。その元凶である月波綾乃。「戦いなさい」と言われた理由。

でももうその理由も聞けないだろう。死ぬのだから。

何もかも諦めた緋之聖は、やがて来るだろう炎に身を委ねるために静かに意識を手放した。

S I L V E R B L I T Z

それからのことはあまり覚えていない。あれからあの戦いはどうなったのか。なぜ自分はこういう経緯で自分の高校の保健室のベッドに寝かされているのか。

そして何より、なぜ今生きているのか。

それが一番気がかりなことだ。あの状況からどうやって生き延びたのか。助けが来た記憶はない。だが相手を倒した記憶も無ければ、あの後戦った記憶も無かった。

ベッドから身を起こして体を見る。驚くことに傷が無かった。数か所の火傷も、顎と頬の擦り傷も。

もしかしてあの戦いは夢だったのか。実は聖は授業中に貧血か何

かで倒れ、無意識の中保健室のベッドに運ばれてあんな夢を見ていたのだ。炎の熱の原因は、この肉を焼けるくらい熱くなった気温の時期。七月真つ盛りだったからに違いない。

ああ夢だったんだ。と安心を覚えてベッドに再び横になる。そして体を解す為に両腕で足をマッサージュしようと、征服のズボンの腿に触れた時。聖を啞然とさせるような事実を体感させる物体を目にした。ズボンの左ポケットに、何か硬質な物が入っていた。大きさは手首の大きさと同じくらいの丸い物。触り覚えがあった。恐る恐る取り出すと、絶望を覚えた。

あの戦いで綾乃から託された腕輪だった。「戦いなさい」と言う声が耳に蘇る。

だが聖の絶望はこれで終わらない。保健室の扉が開き、何も言わないまま保健室に侵入した者がいた。何も反応がないところから保健室の先生はいないらしい。侵入者は保健室の先生ではないと解った。何というか、この侵入者は苛立っている。面倒くさそうと言うか、時折ため息が聞こえた。そして侵入者は保健室の先生が不在なことを好都合に思ったのか、侵入者はずかずかと歩いて聖のベッドの前で立ち止まり、何の迷いもなくカーテンを一気に引いた。そして言う。

「なんだ。起きてるじゃない」

女子生徒の声。侵入者は女子だった。見覚えがる顔。冷たく突き放すかのような口調。

「何よその顔。蹴り殺したくなるほど不快な表情ね」

一体自分は何をしたのだろう。この少女をここまで怒らせて暴言を吐かせるようなことをしたのだろうか。それに関しての記憶は一

切なかったものの、それ以外の記憶は臃げに覚えていた。

あの暗闇に聖を放りだし、「クズ」と罵倒した事。「戦いなさい」と言って戦場に丸腰で立ち向かわせたこと。思いだしてきた。

「まあ命があっただけよくやったとだけ言っておくわ……けど、それだけよ。どうせ弱腰で鼻水垂らしながらパイパイ泣きじゃくって逃げ回ったんでしょ。情けないったらありやしないわね。無様ね」

酷い言われようだった。そこまで酷くは無かったとは思うが、逃げ回ったことは本当だ。

と、あの暗闇の戦場のことを質問しようと口を開いた時。

「あんたが無事だったってことは見届けたわ。もう日が暮れるから帰るのね。」

「たたく、なんで私がこんな面倒なことをしなくちゃならないの。こんなクズは二度と見たくなかったのに」

後半は酷い事をブツブツと呟きながら、綾乃は保健室を出てしまった。質問をする時間もなく、聖はポツンと保健室に残される羽目になる。

沈黙が冷えた空気とマッチして聖の肌に触れる。今まで聖を追いつめた暗闇ほどではないが、この沈黙というのが聖は嫌いだった。静寂は嫌いではない。どこかピリピリとした雰囲気纏う沈黙が気に入らないのだ。

「僕が何したって言うんだよ……」

どうも理解はできないが、とりあえずこの場は帰る事にした。これ以上この場に留まっても利点はない。

ベッドから降りて足を捻る。筋肉が張る感覚と、硬い床のひんやりとした感触が伝わる。上履きを履いて起き上がる。腰、肩、首、

腕と順番に動かして痛みがないか確かめる。

すると聖は今まで何も無かった場所に、何かあることに気が付いた。

「何だこれ」

保健室に一枚しかない大鏡の前に立って、それを確かめる。頬にあったそれは、小さな絆創膏だった。

それも猫の顔がプリントされた絆創膏だった。

「まさか、ね……………」

まさか綾乃がこんな可愛い物を持っていて、善意で張ってくれたなど思い付かなかった。だがそれ以外誰も思い付かず、結局疑問に思っただけ保健室を出た。

月が似合う少女 ？（後書き）

ツンツンツンが続く態度は決してツンデレではない。デレがないのだ。当たり前だろう。ましてや好意が無ければ尚更だ。「ゲスゲスゲスゲス」耳に残る蔑みの言葉。貶す言葉で聖を落ち込ませる。そんな中、聖にも二人の友人ができる。こうして平和な生活を取り戻そうと思った次の瞬間には、あの少女が隣にいたのだ。聖は酷く悶絶した。

月が似合う少女 ？（前書き）

異性、特に美少女からされる舌打ちはどれだけ心を痛めるのだろう。別に好意があるわけじゃない。けれども辛い事は辛いのだ。そこにもう一本線を引ければ幸になるのだが、その日はまだ遠い。

月が似合う少女？

聖は朝が好きだった。小鳥が囁き、暖かい木漏れ日がカーテンの隙間から頬に当たる。例え曇りの日でも雨の日でも、香ばしく焼いたパンを食べれば一日を頑張ろうと思える。活力が出る。

それが何より気持ち良かった。

その日は晴れだった。雲一つない朝。季節は春。カレンダーは変えたばかりのものだ。つまり四月。星院高校に入学してから二週間が経過した。

クラスにもそこそこ馴染み、友達を作る。そして部活に入る。星院高校にはいくつも部活があったのだが、その中の奇妙な名前が目立つ部活に入部をした。その名も無敵武道部。名だけでネタだと解る故、皆はからかいの種にして入部をしなかった。実質部員は数人しかいなかった。聖は気になったので見に行ったのだ。男子が五人。女子が三人。合計八人の二、三年生が狭い部室で武道を嗜んでいた。

聖は心躍った。純粹に心が躍動した。これだ。と直感的に思った。無敵武道部は自由格闘を主に体を鍛えようと言う部活だった。そこにはルールなんていう無粋なものはない。つまり空手対テコンドーで組手を行っているようなものだ。それぞれルールや禁じ手もあるだろう。その一切を排除した格闘技。それが無敵武道部。

しかしそこにも禁じ手はあった。急所への攻撃。殺意を込めた攻撃。これらを破る事は許さない。と、毎回部活を行う際に叫ぶ。言葉にして出すことによって、体に覚えさせているのだ。一種の暗示と言っても過言ではないだろう。だがそれは良い事だと思う。殺す事を目的として設立した部活動ではないのだ。

聖はその日に入部希望を出し、無敵武道部の一員となったのだ。

純粋な学生生活を望んで、健全に体を動かそうと決めた。毎朝六時半に家を出る。朝練に出る為だ。無敵武道部は朝練も欠かさない。その日に入部した聖を無敵武道部は大歓迎し、聖の希望で容赦はないと決めた。元々聖は体を鍛えていたし、体力もそこそ自信がある。しかし着痩せするタイプのようで上着を着ていては筋肉が目立たないのだ。顔も女顔とからかわれたりもした。少し苦労はしたが、舐められないように鍛えてからかう同級生達を片っ端からのした結果、からかわれない体質になった。体質というのは変かもしれないが、本当のことなのだ。あれから聖をからかう輩はいなくなり、逆に友人が増えた。

それから聖は地道に筋トレをして筋力を増加させ、この女顔と低い身長からおさらばしたいと考えていたのだが　　これだ。筋肉は着痩せするせいで目立たず、女顔は治らず、身長も高校一年生で165センチで止まってしまった。まだまだ伸びると信じたいところだ。

「いつてきます」

リビングに飾っていた数枚の写真立てに笑顔で挨拶する。そこには大人の写真があった。

それが聖の両親、そして三ヶ月前まで面倒を見てくれた祖母の遺影だった。すでに聖の保護者は他界していた。両親は聖が小学

三年生に事故で亡くなり、祖母は寿命で亡くなった。

聖はその家に一人となってしまった。学校は奨学金でなんとかしているし、生活費は祖母の遺産と両親な何やら世界で大切な研究をしていたと言つて、莫大な金を残してくれている。相続権が聖しかないため、聖が生活費として使っているのだ。因みに聖の祖父は聖の生誕前に他界している。

不幸の連続で精神が参ってしまうと思つたが、祖母の教えが良かったために何とか立ち直つた。何より祖母の死に目に立ちあい、「聖と生活できて、幸せだった」とこれ以上とないような至福そうな顔で息を引き取つた。親の死に目には立ちあえなかつたし、遺体そのものがなかつたため虚しかったのだが、祖母の死に目に立ちあえて良かったと思う。祖母の表情に救われた気がする。「これから私がいなくても立派な大人になってね」と将来的な心配で最後の言葉を聞くのもいいだろう。了解して安心して旅立たせてやれるが、プレッシャーがかかる。そんな余計な言葉はいらず、「幸せだったよ」と一言言ってもらえれば、自分は今まで大切な人に幸福を与えていたと思える。後悔が無く、プレッシャーもなにもない。

聖は一人でも遅しく生きて行こうと決心を決めたのだ。

そして今日も元気に朝練に向かうため、通学路を全速力で走つた。

SILVER BLITZ

それなのに、これだ。

まさかの非現実的世界に飛ばされるというアクシデントに巻き込

まれた。

その元凶は同級生で同じクラスの女子、月波綾乃によるものだった。突如話しかけられたと思ったら、廊下から闇の森林にいた。綾乃はぶつくさと文句を次々と呟きながら、聖に腕輪とカードをよこした。そして罵倒した。「クズ」と呼ばれた。

無敵武道部の朝練が終わり、HRに出る為に教室に向かう。汗は一通り拭いたし、女性用だがパウダーシートで匂いを根こそぎ奪って上書きする。香水の類いには興味がなかったため、香水を付ける気にはならない。クラスの男子の一人が女子にもてようと無理にパンツを魅せる腰パン。いくつもの香水を重ねて着用し、逆に途轍もない匂いをさせていることに気付かない愚か者にはなりたくなかった。

ドアを開ける。そして僅かに表情を顰める。視線の先には全ての元凶である月波綾乃がいて、沢山の女子とわずかな男子に囲まれていた。

「ねえねえ月波さん。次はここも教えて？」

「あ、そこは私も聞きたかったの」

「そうだよな。文章が回りくどいんだよ。面倒くさいよな」

綾乃は見えての通り、クラスの人気者だ。というのも、綾乃はこのクラスの中で一番の学力を誇り、試験の結果発表でも常に一位を保持している目立つ女子だった。あの無表情のような態度からは信じられない様な光景だった。

というのも綾乃が集まる同級生達に勉強を教えているのだ。特に女子に囲まれているのだが、暴言一つ言葉にすることなく説明を続けている。そしてその女子の他にも数人の男子がいたのだが、それも気にした様子はなかった。「クズ」の一言も発することなく、男子からの質問にも答えていた。

もしかすると昨日のことは夢だったのではなか。と思い始めた聖

は、数秒考えて足を進めた。

「おはよう」

綾乃を中心に十人の同級生に朝の挨拶をする。

クラスに馴染んでいた聖が挨拶をすると、必ず挨拶が返って来る。それこそ綾乃を囲んでいた十人の同級生は全て笑顔で手を上げて、声に出した。

「あ、おはようー緋之くん」

「おいつす」

「おはよー。今日も朝練？」

「緋之はあんなネタ部活よく続けるなあ」

「おはよ緋之くん」

「チョウリイイイッス！」

若干一名変な挨拶だったが、十人全てが反応した。そして、

「……………おはよう」

不機嫌な綾乃が僅かに眉間に皺を寄せ、睨みながら聖に挨拶を返す。

あれ？ と聖が心の中で首を傾げる。

ん？ お？ え？ と十人の同級生が反応した。そして、

「……………チッ」

舌打ちした。聖にも聞こえる程の大音量で。

その瞬間にクラスが凍りつく。ピシツと音を立てるほどの威力。そして恐怖。

緋之よ、一体月波になにをした。とクラスの視線が聖に集中する。まさかのこの一瞬で信頼を崩壊させるところだった。

「ア、アハハ」

その場は笑って逃げるしかなかった。それ以外何もできなかった。すでに綾乃はそっぽを向き、同級生は視線を聖から外さなかった。綾乃から三つ離れた席が聖の席だ。鞆をかけて椅子に深く腰掛けると、ぐでーと力無く机に突っ伏した。いつもなら無い朝練の疲れが、今日に限って出てしまったのか。この場に味方がいないのはやり辛い。どうしたものかと考えていると、

「おいおいどうしたよ。珍しいじゃねえか、緋之ともあろう奴が、クラスで空気になりかけたからって落ち込むなんてよ」

背後から声がした。遠慮がない言いように、聖はこれを利用しようと考える。実際、有難い救い船だった。この状況を打破するには打って付けの人材がネギを背負ってやってきた。

「いや、あそこまで嫌われてるとは思わなくてさ」

苦笑いを浮かべる。予想もしていなかった事態だったのでそれしかないし、苦笑いは正直な答え方だった。

「何だよお前。何か嫌われる事でもしたのか？」

後ろを振り向く。そこには最近友達になった男子、鳴本隼人が笑って聖の肩に手を置いた。

いつでもポジティブで明るく、爽やかでめげないことが有名なクルスの人気者だ。ただ少し勉強が苦手な事も有名であり、別名『爽やか馬鹿』と呼ばれている。

「嫌われることね。例えば？」

つい先日信じられない体験を除けば、覚えが無い。そこまで関わったことがないのだ。

聖の質問に対して、隼人はペラペラと例えを上げた。その速度は聖には真似できないものだった。

「そうだな……着替え覗いたり、実はあの無表情しかない顔が思いつ切り歪んで猫撫でてたり、スタイルいい女子を威嚇してたところ見たり、セクハラしてくる先輩に顔を赤らめてやめてくださいって叫んでるところ見たり」

「どうやったらそんな妄想出来るんだ。別に知りたくもないし真似したくもないけど」

「おいおい、そこはコツを聞いておくべきところ……だ、ぜ……」

ペラペラと快調に滑る口調が最後で狂った。まず音程が低くなり、速度が落ちる。最後には表情が変化していた。この世で一番恐ろしいものを見た様な顔で、聖の頭上を見いた。

あんぐりと開いた口はパクパクとまるで鯉の食事のように忙しく開閉し、頬が激しく痙攣を繰り返す。

まさか。と思った時にはもう遅い。聖の背筋に冷たい氷のような気配を感じた。

「鳴本。まさか……」

「み、見るな緋之。お前はこれ以上見るな。こ、呪い殺されるぞ」

想像通りの反応。瞬時に理解。

やはり聖の背後にいるのはまるで般若のような表情で二人を見下ろしている綾乃だった。通りでクラスの雰囲気再び凍りついていくわけだ。

「クズと馬鹿が揃うと、やっぱりろくなことにならないのね」

生気を感じさせない冷たい言葉。その手の変態にはたまらない。こ褒美なのだろうが、二人はその変態ではないので、この場合はご褒美ではなくジェノサイドに近いだろう。

やばい。これはやばい。ネギを背負ってきたはずの鴨が災厄をも持って来た。最悪だ。

このままでは本当に視線だけでデストロイされそうなので言い訳を考えていたのだが一向に見つからない。鳴本が役に立たないのではどうしようもない。

しかし救世主は遅れて到着した。

「ほーい、皆速やかに着席してくれなー」

き、来たあ！ 聖は心から感謝した。教室に入ってきたのは聖達の担任である大河大胡である。現在二十六歳で二枚目。担当教科は現代文。教える方は綾乃よりも優しく理解しやすい。と、生徒からも大人気な教師なのである。

現に今、

「きゃー大胡くん！」

「こっち向いて大胡くん」

「おはよー大胡くん」

「イケメン」

と、女子達に大人気なのである。上記した通り大胡教師は二枚目だ。性格も優しい。教師という立場であるから収入もある。そして独身彼女の有無は不明ときた。このクラスの女子の九割以上が大胡教師にメロメロなのである。これだけの条件を満たす男性は中々いない。

こんな男性が担任では受け持っている男子が大胡教師に嫉妬の嵐かと思いきやそうではない。

大胡教師は男子にも人気があるのだ。というのも憧れの兄貴として慕われている。体育もたまに受け持っていて、サッカーなども自身がチームに入って教えている。昼休みの時間なら体育館に遅れて入り、バスケットボールに加わっている。さらにユニークは発言と頼り甲斐がある行動と人望を持つ。たまに男子のどうしようもない卑猥な会話に加わったり、恋愛の悩みなどを聞いていたりする。頼れる兄貴なのだ。

そんな大胡教師が担任になってくれて聖も嬉しく思う。

大胡教師は聖にとってたった一人しかいない従兄であり、あの無敵武道部の顧問なのだ。

SILVER BLITZ

「聖い。ちよつといいか？」

HRが終わり、一限目が始まる準備が始まった時だった。背後

からだい大胡教師に呼ばれて振り返る。そこには大量の女子を従えて

本人は本当は付き纏ってほしくはないのだが

大胡教師が聖を見下ろしていた。

「なんですか大兄い

大胡先生」

一応高校では教師と生徒の立場を弁えようと大胡教師から言われていたのだが、どうしてもこの呼び方が抜けない。言いかえて聞き返した。

しかし大胡教師もそこまで気にしていないのか、咎めはしなかった。その代わりに一枚の紙を渡された。

「出してないの、お前だけだぞ。とつと書いて俺にくれよ。ちょっと上から急かされてるんだよな」

見るとすぐに解った。委員会の所属希望書だ。これに書いて希望した委員会に所属するのかを決める。

確か三日前に配られたのを思い出す。確かに出していなかった。これは参ったな。と思い、自分はどの委員会に入りたかったのかを思い出しながら記入欄を見る。
するとある疑問を覚えた。

「大胡先生。なんで記入欄がすでに埋まっているんですか？」

なぜか聖が希望する委員会を記入するはずの記入欄が、すでに一つの委員会が描かれていたのだ。

「ああ、言い忘れてたけど……もうそれしか入れるところ無いから。ほら、さつさと名前書いてくれって。何、ちよつとした親切さ。気にするなって」

あ、あれ？ とそれだけでは説明が不十分だぞ。と名前を書いて
いる内に言おうとしたのだが、大胡教師が名前を書いた所属希望書
を持って行ってしまったために、何も言えなかった。

急いで追いかけようとしたのだが、大胡教師を取り巻く女子共に
妨害されて届かない。結局聖の声は届くことなく、大胡教師は教室
を出て行ってしまった。

啞然とする聖。そしてどこに所属するのかを思い出し

「よ、緋之。一年間よろしくな」

再び登場した爽やか馬鹿
叩いた。

隼人がバシッと聖の背中を

「へ？ どういうことだ」

隼人の言葉の意味が解らず、振り返る。

「俺達図書委員だろ。大河先生がそう言ってた」

つまり隼人も図書委員会に入っているのだ。

同じ委員会にここまで仲が良くなった友人がいるのは嬉しい。大
胡教師の計らいなのだろうか。と感謝はしている。だがどこか嫌な
予感がした。

聖は世の中を少しだけ知っている。こういう良い事があれば、逆
に悪い事が必ず降りかかって来るのだ。それは理のようなもので摂
理にも言い換えられる。良い事だけが続くわけではないのだ。

「でも今回は特別でさ」

「え？」

ゾクリ。来たかな。と嫌な悪寒を微かに感じた。

「隣の二組の図書委員が一人。俺達一組が三人。合計一年生は四人で図書委員会の委員になることになっちまってよ。まあ特殊みたいな感じた。俺はそこまで特殊なんざ思ってもなかったけどよ。……まさかあいつがその三人目になるとはな」

ゾゾゾ。虫が背中に這い上がって来たような嫌な感じ。

これは、もしや。と心が警鐘を鳴らしている。

もしそうだとしたら、実にやめてほしいと思う。今から大胡教師を殴りに行ってもいい。

「で、その最後の一人って……まさか？」

「あ、ああ……そのまさかだ」

隼人が視線を百八十度回転させる。聖もその視線を追った。

「あそこの席の

月波だ」

来たあああああああああああああああ！！

悪い予感がハイ的中。これが世の中の理。良い事ばかりは決して続かない。解ってはいたがここまで絶望を与えとは思ってもなかった。衝撃が大きすぎて、まるで零距离でホルンの低音を最大音量で吹かれたような痛みが脳の奥をがんがんと叩いていた。

「なあ鳴本」

「うい？」

「今から大兄いを今から殴りに行こうと、思うんだ」

死んだ魚の様な眼をした聖がポツリと呟いた。サアと隼人の顔から血の気が引いた。

「ちょ、待て。待てって。情報はそれだけじゃないんだよ。隣の二組の図書委員なんだがな、それがまた可愛い女子なんだって。なによりスタイルが良くって優しそうです」

「へえ。でも僕には関係ないや」

「だ、だから頼むからそんな顔しないでくれよお」

少しだけダークになってしまった聖に、どう反応していいのか解らなくて困ってしまう隼人の悶絶。

これを密かに横目で見ていた綾乃は、今度は誰にも聞こえない程度に舌打ちをした。

SILVER BLITZ

最悪な気分になってしまった。

解ってはいたがここまで辛くなるとは思ってもいなかった。昨日の件が一番大きい。というよりも命を失うような体験をしてから次の日に平気な顔で登校するほうが精神がおかしいのかもしれない。はやくも放課後になってしまった。勿論授業なんて少しも耳に入らない。集中力など元からない。

そして気付いた事がある。昨日綾乃から預かった腕輪が変化していた。ズボンのポケットに入れていたので、まるで野球で使うボー

ルを入れているように膨らんでいたのだが、朝のHRを終えると変化を終えていた。赤いリストバンドになっていた。しかしカードは無かった。あのアーツというカードだ。

まあ聖にとつてはどうでもよかったことなのだ。なぜならこれからもつと乗り気ではないことをするからだ。大胡教師に委員会の所属希望書を渡したその日が最初の集まる日だというのだ。なので校舎には放課後だということにも帰宅をせずに委員会へ向かう生徒で溢れ返っていた。

そんな中聖は空いている道を選ぼうと思い、一度外に出た。というのも校舎の外にも通路があり、上履きでそこを踏めば咎められないのだ。流石にグラウンドにまで入ると怒られるが、通路はコンクリートなのであまり汚れない。たまに土が落ちているが避ければ済む話だ。

空いている道は図書委員が活動する図書室とは逆方向の道で、それ以外の委員会に向かう道ではないので人通りはない。そこをゆつくりと進む。なるべく遅れたい。綾乃を見たくない。その一心で。

すると一人だけ生徒を見つけた。皆が慌しく委員会に向かう中、その生徒

女子だった。ベンチに座って本を読んでいる。少し近づいて襟を遠くから覗くと一年生のバッジをつけていた。同級生だと解る。

その女子は大人しそうな顔つきで本を読んでいた。時折吹く風が彼女の長くウェーブのかかった髪を揺らし、聖に甘い香りを届けた。なんと綾乃とは真逆の好印象的な少女なのだろう。やっとまともな女子を見れた気がする。と聖は小さな幸せを味わっていると、その視線に気付いたのか少女が顔を上げた。

「あ、あれ………済みません。今何時か解りますか？」

彼女は気付いていない。その腕にしている小さな腕時計があることと、背後に大きな時計があることを。あえて突っ込まないのは聖

の優しさで、この出会いに感謝しているからだ。口調も優しく、声が透き通っている。

聖はブレザーの胸ポケットから携帯電話を取り出すと、現時刻を教えた。

「今は五時だね。もう委員会の集まりは始まっているけど」
「え？ あ、そうだったんですか？」

彼女は慌しく立ち上がり、本を閉じた。布のカバーがしてあったので、それだけ本を大事にしているのだろう。聖に会釈をしてその場を移動しようと一歩を踏み
立ち止まった。
そして振り向く。

「あ、あの。度々済みません。
図書室は、どこにあるかご存知ないですか？」

最後の方は小さな声だったので聞こえ辛かったが何とか聞きとれた。

そしてもう一つ解った事がある。本が好きでこの時間に慌てて図書室に向かおうとしている。そしてその場所が解らない一年生。

「もしかして、図書委員になった人？ つまり二組の人だ」
「あ、はい。そうです。けれどなんでそれをご存知なんですか？」
「僕も図書委員にさせられたんだ。ちなみに一年の一組。君の隣のクラス」
「そうなんですか」

やはり同年代の異性と話すとは新鮮な気分になれる。それが清楚な女の子であれば尚更の事だ。もし相手があの罵倒しかしない綾乃であれば、こんな気分にはなれやしないだろう。

「じゃ、途中まで一緒に行こうか」

「はい。お願いしますね」

「敬語はよしてよ。同級生なんだから。」

僕は緋之

聖。君は？」

「はい、あ、うん。私は都竹ちさ。ここで本を読むのは初めてだから、迷っちゃって。緋之くんが来てくれて助かったな。本当に有難う」

そう。これが普通の高校生活。

出会いがあり、健全な生活をし、青春を謳歌する。思春期を迎えたのに内面でイジイジするのは嫌だったから、こういう可愛い女の子と知り合いになれるのは素直に喜べた。

なのに。

なんでこう言う時に無粋な異物が現れるのだろう。

「クス」

呼ばれた。名前ではない。あの災厄の元凶にとっては固定した名なのだろうが。

こんな名で聖を呼ぶのは一人しかいない。そう、あの少女。

「……………月波さん」

月波綾乃が、行く先に立っていた。仁王立ちだった。なぜあの華奢で小さな体であれだけの覇気を纏えるのかは不明だったが、とにかく物凄い剣幕で聖の前に立っていた。

「本当にクズね。どこまで私の手を煩わせるの？ まさか図書室の場所を忘れたとか言わないでしょうね。もしそうだとしたらどうしようもないクズね。蹴り殺すわよ？」

相変わらずの言い様だった。言われ放題だった。
と、そこでなんとちさが聖と綾乃の間に入った。

「あ、あの　　一年生バッジをつけてるってことは私と同じ一年生なんですよね。月波さんでいいですよ。あ、緋之くんは迷っている私を助けようとしてくれて遅れたんだと思います。なので悪いのは私なんです。ごめんなさい」

静かに頭を下げるちさに逆に驚いたのか、綾乃は少し黙り、そっぽを向いた。

「ふ、ふん。そんなの聞いてないのよ。……まあいいけど。私に気に入らないのはこのクズのせいで私がこのクズを呼びに行かないとなくなっただけよ。あんたなんて知った事じゃないわ」

「…………ごめんなさい」

強気を纏っていた綾乃の表情がゆっくりと崩れる。

どうやらちさは綾乃にとって苦手なタイプのようだ。

「そんなに軽々しく謝らないで。それに同級生なんでしょ。敬語を使わないでよ」

なんと罵倒がなくなった。提案に近い命令が出たのだ。これは意外だった。

聖がほうほうと頷いていると、居心地が悪く思ったのか綾乃はそ

の場で踵を返した。

「行くわよ。とっとと行かないと委員長に何を言われるか解ったもんじゃないわ」

「そうだったな。行こうか」

「うん。行こう」

綾乃を先頭に歩き出す。向かうは図書委員会が行われている図書室だ。

だがこの集まりが何を示しているものなのか。

聖はまだ知る由も無かった。

月が似合う少女 ？（後書き）

最高の出会いには感謝したい。爽やか馬鹿と、清楚で大人しい少女。仲良くなつてよかったと思える。けれどもあの少女はこう言った。

「クズと馬鹿」だった。また変なレッテルを張られた。

図書委員会が始まる。数人の先輩と委員会としてこなす行事。主な仕事を聞かされる。しかしそれは表の仕事だった。

裏の仕事はその後で説明される。少年は激しく驚き、再び絶望した。平和が音を立てて瓦解した。

月が似合う少女 ? (前書き)

トラウマに向き合うには、それなりの覚悟が必要だ。なのにこの男達は覚悟すらさせてくれずに、聖をトラウマに向き合わせようとしたのだ。

月が似合う少女？

言い訳を考えていた。図書委員会に遅れた訳を話さなければ後で煩い。あの綾乃を動かす上級生なのだ。絶対に後が怖い。

前を歩く綾乃の髪を見ていた。黒いセミロングの髪緑色の力チューシャ。そんな髪が似合う少女なのだが、聖は昨日のことを思い出していた。闇が辺りを覆い始め、分厚い雲の切れ間から光る月が顔を覗かせた。その一瞬。

あの月を背景に立つ綾乃を、聖は綺麗だと思ったのだ。

しかし次に会ったら罵倒を繰り返された。あの綺麗な少女にもう一度会いたいと思ったが無理だろう。なによりあの非現実的な世界に再び戻りたくない。

「着いたわよ。入りなさい」

目の前でした綾乃の声に驚いた。どうやら図書室に到着しらし。

まさか眼前にまで迫られているとは思っていなかった。拳一つ分しか入らない距離まで二人は近づいていた。身長も五センチくらいしか差が無いので顔が近い。

驚いて目を剥いていると、

「何その顔。蹴り殺したくなる」

普通の女子なら驚くか羞恥で顔を赤らめて離れるか、少し酷くてビンタを頬に見舞うのだろう。

だが綾乃は違った。顔を赤らめることなく眉間に皺を寄せて噛み

ついて来た。まさかの反撃に聖が黙ってしまふ。どうやら考え事をしすぎていたようで、聖の方から距離を詰めていたらしい。なのにこの反応はこちらが傷ついてしまいそうになる。

「ほら。ちさも早く入りなさいって」

「あ。う、うん」

綾乃が開けたドアからちさが図書室に入る。

続いて綾乃が図書室に入る。その時に舞った髪が聖の鼻に触れる。少し甘い香りがした。擦れ違いに綾乃は舌打ちを忘れない。

落ち込んで図書室に入ろうとする聖。が、ドアを閉める時に「あれ？」と思つて一瞬行動が止まる。

しかしそれで終わった。それを聞こうとした時、もう一つの大きな疑問を覚えた。図書室にはすでに図書委員会の委員達が集合しており、担当の教師もそこにいた。

「大兄い……？」

数人の先輩の他、机に座っていたのは聖の従兄であり担任である大河大胡だった。

「まあたお前は。先生つて言えつて何回言つたよ、俺。」

まあいいんだけどな。俺が図書委員会の担当したんだよ。つか上に志願した」

「な、なんで？」

「お前がいるから」

ビシッと大胡は指を向ける。向かう先は勿論聖。聖は驚いて言葉が出なかった。

数秒の沈黙が図書室に訪れた。これでは駄目かなと判断したのか、

一際体が大きい先輩が柏手を打って皆に指示を出す。

「このままじゃ埒が明かないから……………とりあえず皆、この丸テーブルに座ってくれ」

聖達一年生の他に先輩は二人だけしかいなかった。男女一人ずつ。その二人が動いてテーブルに座ったので、四人もそれに従った。

「それじゃ、この図書委員会の仕事を説明するから……………」

SILVER BLITZ

仕事は簡単なものだった。それこそ一人一つの仕事を受け持つても十分すぎるほどの楽な仕事だった。

数枚のプリントが回されて聖達一年生の仕事を説明されるが、殆どの大切な仕事は二年生が担当していた。それはありがたいことだった。

二年生は二人いる。まず図書委員会委員長の小泉勝。巨軀な身体とがっちりとした四肢。短めな黒髪と常に微笑を浮かべていた。イメージ的には野球部かなと思って聞いてみた所、野球部のキャッチャーをしているのだという。意外と似合いそうだった。

二人目の先輩は女性で、大人の女性のような、綾乃やちさとは違う綺麗が目立つ。図書委員会副委員長の里宮百合子。光の当て具合によつてはこげ茶に見える黒髪を長めに伸ばしている。右目の下に

泣き黒子がある。そして長身である。おそらく聖よりも五センチ高い。つまり百七十を越している。

この六人と大胡教師を合わせた七人で図書委員会をやっていくのだ。そこに三年生の先輩がいないということが疑問だったのだが、大胡教師は「この図書委員会にはそこまで人員はいらない。それに三年生は受験だから」と言っていた。妥当な理由だと思った。

「それじゃ、今の説明でどこか解らない所があったら質問してくれ」

勝が皆を見渡して言う。しかし誰も手を上げない。質問がないのだ。意外と勝の説明は丁寧で解りやすい。委員長には適役だった。

「小泉くん。相変わらず説明うまいわね。その情報整理能力を分けてほしいわ」

「無茶言っなよ百合。これでも一時間で即席にまとめただけなもんだ。大胡先生ならもつとうまくまとめられるだろうに」

「え？ 俺？ まあね」

この三人はいつもこうなのだろう。大胡教師もまるで二人の先輩のように接している。信頼され、信頼している証拠だ。

そんな三人を見ている一年生四人は、その様子をじっと見ているだけだった。それを察したのか大胡教師が勝へ助け舟を出した。

「小泉。仕事の説明は終わったが、お前達の自己紹介はまだなんじやないか？」

「そうでしたね。それを忘れていた」

やっと本来の仕事を思い出した勝が一年生に向き直る。しかし本来と言うのなら自己紹介が一番最初にやっておくべきだとは思わが。

「俺は二年生の小泉勝。部活は野球部でキャッチャーだ。大胡先生に誘われて去年に図書委員会に入った。そして今年、いつの間にか委員長になっていたのは驚いたが」

勝も大胡教師によって図書委員会に入らされたのだ。そして図書委員長に任命された。これも大胡教師のせい
推薦によつて。

しかし本人はそこまで嫌そうな顔をしてはいないので、文句の一つも出さなかった。

「次はあたしね。里宮子百合よ。皆は百合先輩って呼んでね。部活には入っていないわ。ここにいるのが楽しくてね。あ、趣味はコミニケーションよ。特に女の子と、それも美少女で可愛くて小さい娘がいいわね。
だから今年は楽しい委員会になりそうね」

ギリリと百合子の双眸が妖しく光る。それにロックオンされているのは綾乃とちさだ。ギクリ、ゾクリと綾乃とちさの背筋に悪寒が走る。

すでに一年生側の紹介は終わっているので、紹介をする必要はない。

そして仕事の説明も終わっているの、今日の委員会はここで終わるのかと思っていた。が、それを見透かしたように大胡教師が言った。

「待て聖。まだ説明は終わっていない」

すでに鞆を手にとろうとした聖の動きが止まる。原因は二つある。それは勿論大胡教師の制止であるのだが、もう一つの大きな変化に

ようものだった。金縛りに近い。

この図書室の雰囲気が一変した。

何と表せばいいのだろう。今まで白一色で塗り潰された光りの世界にいたのに、一瞬で黒一色で塗り潰された闇の世界に来てしまった。そんな感じ。雰囲気そのものも変化し、息さえ詰まりそうな空気。

ゆつくりと視線を動かしてこの場にいる全員を見る。その空気を作り出した原因が解った。

聖以外の六人が、聖を見ていたのだ。しかしそれだけではこれだけの雰囲気を作り出されない。

だが聖は覚えていた。六人の目を。昨日、闇の森林で聖に襲い掛かって来た灰色ローブの男と近い目だった。普通とは遠くかけ離れている。ただの高校生にこれだけの雰囲気を作り出せるはずはない。つまりこの六人は普通ではないのだ。

「
っ！」

ガタツと椅子を鳴らして立ち上がる。金縛りは力任せに振りほどいた。

「まさか、昨日と同じ……月波さんも、大兄も僕の命を狙って」

もしあの灰色ローブレベルのいかれた人間に囲まれているならば、脱出は不可能だろう。ならば戦うしかない。どこまでやれるかは解らないが、一人くらいなら倒せると思った。狙うは爽やか馬鹿こと隼人だった。一気に距離を詰めて張り倒す。

「なるほど。さっきのは嘘だったんだね」

「……………何がよクス」

その場で構え、少しだけ笑みを浮かべる聖に綾乃が答える。

「月波さんさ、さつき図書室に都竹さんを入れる時。ほら、ちさも早く入りなさいよ。って言ってたろ。そこから疑問に思ってたんだけどね。名で都竹さんと呼ぶことは、それだけ親しいってことだ。今朝、月波さんはクラスの同級生に勉強を教えていたけど、皆を名字で呼んでいた。けれどなんて都竹さんは名で呼ぶのかな。隣のクラスであまりまだ交流がないのにな」

昨日の件がトラウマになりつつある。握って前に突き出す拳が震えている。

何とか息とペースを整えようと深呼吸を繰り返す。まさかこのような展開になるとは思わなかった。いや、本当なら少しだけ予想できたはずだ。この図書委員会の中に月波綾乃がいる限り、聖を危険に脅かそうとする存在を危惧することはできたはずなのだ。

なのに出来なかった。原因は聖の油断にある。まさか友人として近づいてきた隼人が、変な場所で読書をしていると見せかけて待ち伏せていたちさが、そして何より聖の従兄であり信頼をおいている大胡が、殺気を秘めた目で聖を追いつめようとするなど思っていなかった。

「昨日の　灰色ローブの男、見た事が無い攻撃術を使って来た。あれが多分魔法なんだろう。月波さんがあの世界に連れて行ってくれた世界。それがこの図書委員会がやっていることなんだろう」

問いかけても誰も答えない。聖はさらに問い詰めた。

「確かに僕は油断していた。まさか大兄いが敵だったとは思ってい

なかったし、昨日の件のことについても全員がグルだったなんてね。
けど、僕を舐めない方がいい。昨日の魔法を使われても、
一人くらいは屠れる自信はあるよ。それに……………」

聖はポケットの中に入れてあったリストバンドを取り出し、左腕
に填めた。再び構える。

「これで多分戦えるんだろう。少しでも魔法が使えるなら、屠れる
人数は二人に増える」

部活のトレーニングやスパーリングで培った身体能力をフルに使
って戦うつもりだった。

そして今にも跳びかかろうとしたその時。大胡教師が立ちあがっ
た。

「聖。残念だけどその腕輪だけじゃ魔法は使えないよ」

「大兄い、悪いんだけどこの状況でそんなこと言われても信じられ
ない」

真面目な顔の裏には何かある。聖は本能的に悟っていた。それが
例え本当であつたとしても、魔法が使えなかったとしても戦うしか
ない。

その時だった。

「あんた、それ本気で言ってるの？」

「ああ。月波さんが都竹さんとグルだつてことだろ。今更取り繕っ
ても無駄だからね」

「それじゃない！」

綾乃が聖の前に立つ。聖は臆する事も無く綾乃を睨む。皆が一瞬

動こうとした。このままでは聖が綾乃に襲い掛かり、その細い首を締め上げて骨を折りかねない。

しかし聖は動かなかった。いや、動けなかった。

「それじゃ、ない……」

目の前にいる綾乃は、この数週間で見た凜とした綾乃の顔とは思えない程歪んでいた。この表情は悲しい時、今にも涙がこぼれそうな寂しい時のものだ。

図書室にあったピリピリと張り詰めた雰囲気が一瞬和らぐ。驚くべき物を見てしまった。綾乃の意外な表情に啞然としてしまったのだ。

聖は構える力を一瞬緩めてしまった。それを大胡教師は見逃さなかった。

「取り敢えず、落ち付けよ聖。大丈夫だ。俺達はお前の命を奪おうとなんざ考えてはいないよ？ これはテストだったんだ。お前の度胸を計った。許してくれ」

大胡教師はこれ以上とない優しい声で聖に近づき、聖の両手を己の両手で握った。

「大丈夫。この図書室 この高校の中でお前を故意に傷付ける奴なんていないから。いたとしても、俺達を守ってやる」

赤ん坊を安心させるような暖かみがある。実際に聖は今、さつきまで己の中で燃えていた戦意を喪失していた。大胡教師の説得もある。それに加えて今まで聖に向けられていた殺気がなくなっていた。そして最大の影響は綾乃のあの寂しそうな表情である。

「ごめんな緋之。こうするしかお前をメンバーに加える手立てが無かったんだ」

勝が巨体を揺らして聖に歩み寄り、腰を落として聖の頭に手を置いた。ゴツゴツとして硬い手だったが大胡教師とはまた違う頼もしさを感じた。

しかし疑問に思う点がある。

「メン、バー……？」

図書委員としてではないだろう。今の殺気と、昨日の闇の森林と深く関係したものと予想した。そしてそれは正解だった。勝は一瞬考え、ゆっくりと口にした。

「もう月波に聞いているとは思うが、昨日の戦いにおいてお前を襲ったのは魔術師だ。この現実で魔法は非現実的で信じられてないし、存在自体も証明されてないからな。その点は錬金術や黒魔術、まじないや呪いと同じようなものだ。けど魔法は存在する。昨日、お前は見て来たはずだ。確か炎使いだったっけな」

勝に加えて百合子、ちさ、隼人が歩み寄る。

「俺達も魔法が使える。そしてその魔術師の総称をシルバーブリッツという。 シルバーブリッツは高校の図書委員会がそれ

にあたる。図書委員会の委員の殆どは魔術師と考えて良い。そのシルバーブリッツは高校の放課後、月に何度か戦わなくてはならない。あるものを守るために」

「あるものを、守る？」

「各高校の偏差値だ」

意外な答えが返って来た。聖の予想では生徒の命だとか、教職員の寿命だとかを考えていたのだが、そこまで大きな物ではなかった。予想外の答えで、かえって聖は脱力してしまった。

「確かに私も最初聞かされた時は、こんな感じでスベったわね。なんだそりゃ。ってね。緋之くん、今の君の気持ちは解るわぁ」

百合子は面白そうにケタケタ笑って聖の肩を叩いた。聖にとっては何が面白いのか理解出来かねなかったが、勝の表情によってそれが真剣な答えなのだと解った。

高校の偏差値と言えば聖も何度も意識したことがある。中学生の時に聖に一番適している高校の偏差値を探し、もしくはそれ以上を志して受験に臨むのだ。そして今ここにいる。

聖の場合、自分の学力で入れる高校を探した結果がこれだった。しかし当時の聖の学力では無理と言われていた高校なのだ。それを大胡教師の協力、塾講師の代わりとなつて無料で勉強を教えてくれたため、この高校に入れた。

「昨日の戦いも偏差値に関係しているんですか？」

聖は勝に質問する。答えはすぐに返ってきた。勝は首を縦に振り、肯定としたのだ。

「ああ。昨日の戦いは……………どこの高校だったけ？」

「北海道の、詳しいことは忘れたけど、北高校だったような気がしたわね」

勝は助けを求めようと隣にいた綾乃に聞く。綾乃は渋々答えていた。

名前を覚えられていない高校は可哀想だったが、今は申し訳ない

が無視した。

「そうだ。何とか北高校だった。そこに昨日は月波とお前が戦ったんだ。昨日は助かったな。あちらもまだ委員会が決まっていなかったから、三人しか出せなかったようだな。お陰で勝てたが」

「そうね。とりあえずこのクズを囷にして一人を離れさせて、あとの二人は私が始末したけど。あちらの二人は三年生だったようだけど、話しにならなかったわ」

「おいおい。囷とは酷え話しじゃねえかよ月波」

綾乃の容赦ない言いように、流石に聖が可哀想だと思ったのか、隼人が突っ込みを入れた。だが失敗に終わった。

「あんたは黙りなさい馬鹿。二週間で第二にしか上がれない戦力外は邪魔なのよ」

「じ……っ」

綾乃の暴言の矛先は隼人に向かい、隼人はあまりの言いようにキーンと唸りを上げて猿の様に暴れ回ろうとしたが、大胡教師に羽交い締めになされてその場に固定された。

「月波。いくらなんでも今のは言い過ぎだ。俺は三カ月でようやく第二だぞ。二週間で第二に上り詰めたのは、確かにまだ戦力とは遠いが、成長が早い。お前ほどではないが、先が楽しみな一年生であることには違いない。だからそう酷く言ってやるなな？」

「……ふん」

勝は流石委員長であるだけあって、説得力がある。あの綾乃をここまで大人しくさせてしまい、暴言の一つも出させない。

「まあ囧と言っても、まさかお前があそこまで出来るとは思っていなかったがな」

勝は綾乃の態度に苦笑いを浮かべながら、聖に向き直った。

昨日のことを言っているのだろう。思い出したくはないが、少しだけ思い出して確認した。あの灰色ローブの男の腕を押し折った後、反撃されて逃げ回った。確かに視力を振り絞って反撃に出たがカウンターを喰らってしまった。聖が魔法を使えないが、それなのに反撃に出たことを言っているのだろうか。

「い、いえ。……僕は逃げ回ることしかできなくて。最後には、だらしなく倒されてしまったし。勝ったって言いましたよね。多分僕の考えではサバイバル戦のようなルールで、僕を倒した男を、あの後月波さんが倒したんでしょう。……僕は結局、何もできませんでしたよ」

だから僕を平和に戻してほしい。そう言おうとした。魔法具をもらっておきながら魔法を使えなかった聖は戦力にならない。なのでここにおいても邪魔なだけなのだ。戦力にならないなら、最悪綾乃のやったように囧にするしかない。

僕を巻き込まないでください。考えたことを口にしようとしたその時。

聖が一番驚くことを、勝は不思議そうな表情をして言い放った。

「何を言っているんだ。あの灰色ローブの炎使いの男は、緋之が倒したんだぞ？」

時間が、止まった。

聖の中で思考が強制中断された。全身の力が抜ける感覚。軽く膝

が震えている。頬が痙攣し、やっと動き再開し始めた思考が「噓だ！」と勝の言ったことを全力で否定した。

まさか、冗談だろ。と不安そうな顔で大胡教師を見た。大胡教師も勝同様、不思議そうな顔で聖を見下ろしていた。隼人、ちさ、百合子も同じ表情だった。唯一違うのは綾乃で、何を今更といった感じで溜息を吐いた。

「噓、でしょう？」

やっと口から出た言葉。真実を確かめる為のワード。

だが返ってきたのは同じ答え。何度問いただした所で、結果は変わらないだろう。聖を漆黒の疑問の世界へ誘う言葉。

「あの男はお前が倒したんだ。覚えていないのか？」

覚えていない。灰色ローブの男のカウンターで死を覚悟した途端に意識を失ったのだ。

「現場にはあの炎の男が魔術を乱発した痕跡があったわ。炎を使うのだから焼け焦げた跡がほとんど。けれど不思議な痕跡があった。あの炎の男が炎以外の魔術を使用するなら解るけれど、違うでしょうね。」

あの森林で焼け焦げた木以外に、強い打撃や衝撃で押し折れた木の幹が何本もあったのよ」

それ多分あんたでしょ。と綾乃は聖を指さして言った。

正直に答えを申し出るなら「解らない」だ。意識を失ったのだ。意識を失う前の記憶もあるが、探ってもそこまで木を押し折った記憶はない。枝に登って反撃に出たが、幹を折ってはいない。そこまで力が出せない。闇の森林には太い木々があるが、あれをどうやって生身の人間が押し折るのだろう。魔法を使わなければ無理だろう。

「いや、違うよ。僕は君からあの腕輪と、……………アーツだっけ、あのカードを受け取ったけど、あれを使った覚えなんてないよ」

本気でパニックになりかけた聖を見て、綾乃がその左腕をグツと掴んだ。

「月波さん？」

「証拠があるわ。これを見なさい。」

綾乃は聖の左腕ある腕輪を突きだした。そこには五つの穴がある。これらを指をさし、綾乃は問う。

「あんた、この穴にアーツのカードを入れた？」

「い、入れた。中心の穴」

「そう。じゃ、今手元にそれはある？」

言われた通りにアーツのカードを探すべく、征服のポケットに手を入れた。綾乃は掴んでいた左腕を離してやり、搜索を楽にさせた。三十秒経った頃だろうか。聖は青い顔をして言う。

「……………無い」

もしかして高価なものだったのだろうか。だとしたら弁償で償いきれるものなのだろうか。と聖の不安が倍増する。

それを綾乃は理解していた。

「安心しなさいクズ。あのカードは腕輪にはめたら、戦いが終わってから自動消滅することになってるの。補充も簡単だから、そんなに不安がることは無いわ」

「そ、そうなのか……」

おいおいそれを早く言ってくれ。と言いたかったが、言うともつと暴言を言われそうなのでやめておいた。

聖を安心させてくれたのだろう。確かに「クズ」とは呼ばれたが、その言葉には追い詰める様な意味は一切含まれていなかった。不安がることはない。綾乃なりに元気づけてくれたのだろう。と思った。本当は綾乃は優しく、いい少女なのではないかと思って、それを口にしようとして

絶望の谷に突き落とされた。

「ただし自然消滅はカードを一度でも使用したら。の話だけど」

聖の中で綾乃は優しいという意識が瓦解して消え失せた。

まさか安心という油断を覚えさせ、そこから絶望に叩き落とされるとは思ってもいなかった。

そこまですなくてもいいじゃないか。本当は綾乃はドが付くほどのSなのかもしれない。

「あんたは今、アーツのカードを持っていない。つまり腕輪にはめて魔術を使っただけで証明されたわ。これが証拠。まああの炎の男はあっちのメンバーでも一番弱いようだけど、火力だけは強かったわね。それをアーツで倒すなんて普通馬鹿みたいな話だけど。一応褒めておいてあげるわよ。クズ」

最後の言葉はわずかにデレた。図書室の雰囲気が一瞬「萌え」に昇華したが、聖はそんなことは意識に入っていなかった。

「僕が、あいつを倒したのか？」

「そうよ。最後に骨は拾ってやろうと見に行っただけど、焼け野原で倒れる炎の男と、銃だか剣だか解らないアーツを手にして、あんた

はその場に立つてた。体中に火傷を負ってたけど。ああ因みに、あの世界で傷を負っても、この世界に戻れば回復するからそこは安心すれば？」

「僕の意識はあったのかい？　けどまだ信じられないよ、あいつを僕が倒したなんて」

「意識はあったんじゃない？　目は開けてたし。けれど何度も呼びかけても反応しなかったわね。まっすぐと月を見てたわ。けど一分もしない内に倒れるし。回収するの大変だったんだからね。感謝しなさい」

綾乃の情報を紡ぎ合わせても記憶は戻らない。実は思い出したくないだけで、自己暗示をかけているだけなのではないのだろうか。と自分を疑い始めた。

「けどたまにいるんだよな。緋之みたいに、窮地に追いつめられると無意識の内に戦う奴ってのがな。一番厄介な奴だ」

勝が唸るように洩る。無意識の内という可能性もあった。思い出したくないという自己暗示と少し似ている。だがそれよりも疑問に思うことがあった。

「厄介……ですか？」

「ああ。無意識ってのは意識をしていないってことだろ。つまり何も思っていないし、何も感じない。それらはとても怖いものさ。何も感じてないから痛みがないんだ。身体的な意味でも、心や意思の意味も。思いがないから何よりも残酷だ。身体の痛みがないから傷の痛みに怯まない。どこを損傷しようとも恐れがないから動きを止めない。意思がないから弱点とか関係ないところまで滅多打ちにしようとする。……つまり、魂の暴走」

聞いていて怖くなってしまった。

つい昨日の自分が無意識の内に戦ったのだ。そして相手を倒してしまった。綾乃がそこまで心配しなくてもいいと言ったのでそこまですごくはないのだろうか、それとこれとは話が違う。

もし昨日、綾乃の言うとおり無意識の内に戦って、相手を殺してしまったら。

聖は殺人者として、その罪を一生背負わなければならないのだ。

「……………月波さん。それで、相手はどうなったの？　ちゃんと生きてたのか？」

恐る恐る聞いてみる。意識のあった内は正当防衛として腕を折る程だったのだ。無意識の内に戦っていたら、八割の確率で相手を殺しているだろう。

「生きてたわよ。ちゃんと回収されてたわね」

ふう。と溜息を吐いて綾乃は答えた。その顔はどこか不満そうだったが、聖にとっては心底嬉しいことだった。

「でもこれで我が校の偏差値が僅かに上がった。まだ公に発表はされてないけど、勝ちも勝ちだ。けどこの調子で勝ち続けるという保証はないし、こんな奇跡と偶然はもう二度と訪れないだろうな。次からは小泉と里宮が出せるし。鳴本はせめて次くらいには第三の手前くらいになつとこうな。都竹はそのままの調子でいい。月波はもうちょっと手加減を覚えろ。このままじゃ見方まで巻き込みかねないからな」

大胡教師の指示が発せられる。一人一人を丁寧に指示する姿は司令官のようだった。

大胡教師の指示にはほとんどが返事を返して、あるいは出された課題をこなそうと思っていたのだが、綾乃だけは相変わらずフンと鼻を鳴らしてそつばを向いていた。
そして最後に聖を見た。

「聖はこれから俺と個人レッスンな。色々とありすぎて混乱してるんだろ。夕飯でも食べながら教えてやるよ。戦いと偏差値のことと、戦い方についてな」

「あ、は、はい」

真剣な大胡教師の指令がいきなり聖に向いてきたので、少し戸惑い気味で返事を返した。

その日はこれで委員会が終了となった。もうとつくに他の委員会の集まりは終了しており、時計の針も午後十八時を過ぎていた。

SILVER BLITZ

「ぶっは。やっぱ仕事の終わりはこれに限るよなあ」

大胡教師は盛大に歓声を上げて、口の周りをビールの泡で包みながらつまみを食べた。

そんな大胡教師も見慣れたものだ。大胡教師が聖の家庭教師のよくなものになる前から二十歳を超えていたので、よく夕飯と一緒に食べたものだ。その時は祖母もいたので、一緒に騒ぎながらビール

や日本酒を飲んでいた記憶がある。

そう言えば大胡教師は、祖母に鍛えられて酒に強くなったんだっけなあ。と昔の記憶を思い出した。聖の祖母も大変酒が好きな人で、手製のつまみを聖と一緒に突きながら自身は酒を片手に昔の武勇伝を聞かせてもらったものだ。勿論その時は、今もだが聖は未成年であるから飲んでいたのはジュースや炭酸飲料だった。

聖は祖母の武勇伝が好きだった。

祖母は聖の歳の時はそれはもうやんちゃで、改造されたエアガンなどを振り回してブイブイ言わせていたらしい。たまに家から見えるパトカーを見て「ポリ公が、またあたしを捕まえにきたのかね」と呟いていたことがある。意味は最近になって理解した。

そして今日の前でビールの美味さに感激している大胡教師に、祖母から教わったつまみを出してやった。椎茸のバター醤油ソテーだ。祖母は味が濃い目のほうが好きだったので、これをやる時は大抵醤油を焦がす。これが中々の美味であつた。しかしその度に母に洗い物のことで叱られていた。

「はい、大兄い……大胡先生」

「今は大兄いでいいって。学校じゃないんだから。」

おつ、

おばあちゃんの椎茸のバター醤油ソテーじゃん。いいねえ大好きだよこれ」

「うん。僕も好きだよ」

「だよなあ　　ん、うめえ。ちゃんと醤油焦がしてんじゃん。解ってんなあ。いい嫁になるぞお」

「後で洗うの面倒だけどね。今水に浸してるけど」

台所には焦がし醤油の香ばしい香りが残っている。それも好きだった。

因みに飲んだ後のシメは、椎茸のバター醤油ソテーの醤油を温めなおし、温かいご飯の上にかけて食べるのだ。

「それじゃ大兄い。昨日のことなんだけど」

「ああ、なんでも聞いてみるよ。この神つまみに免じて答えてしんぜよう?」

酔った勢いで軽はずみな発言を繰り返す大胡教師。もうそれに慣れてしまっているので、聖は冷蔵庫の中にある下校中に買ったコーラの缶を出した。

「高校の偏差値を守って戦うシルバーブリッツの存在を、大兄以外の先生でその存在をそれくらい知っているの?」

その質問に大胡教師の進む箸がぴたと止まった。そして動き出す。

「そりやお前。決まってるだろ」

「どれくらいなの?」

「全員」

一瞬コーラを持つ手から力が抜けてしまった。まさかここまで簡単に答えられ、それが当然のような顔をされて答えられると逆にこっちが困る。

「因みにな。シルバーブリッツの存在を知るのは、平均が大学生って答えが出されているな。お前みたいに高校から選ばれてシルバーブリッツになれば話は違うが、それ以外の同級生は皆知らない。だってそうだろ。高校生生活の裏側では非現実的な戦いが行われてるって誰が信じる? でも大学生になると話は違う。大学生の

特に教職免許を取ろうって奴は必ずシルバーブリッツの存在を知ることになる。それが今の日本の裏の法律になっているからだ。教

職員になるなら、必ずそれを知らなきゃならねえ。特に高校生の教員になりたいって奴がたら、必修よりも恐ろしいことになるな。まあ要するに俺のことなんだが」

そう言えば昔、大胡教師が大学一年生になった頃だった。勉強を教えてもらおうと部屋に大胡教師を招いたことがある。そこで余談として話されたのだ。いや、あれは呟きに近い。「俺は高校生の教員にだけはなりたくねえなあ」と言っていた。それは今でもはつきりと覚えている。

それに対して「なぜだ」と問うたが、答えは結局返ってこなかった。代わりに大胡教師に頭を撫でられ「俺がお前の担任になったら、必ず守ってやるからな」と言われた気がした。ここはそこまで覚えていない。

「まあ偏差値に関わることだ。教員側が把握してないでどうするよって話だな」

笑いながらビールを最後まで飲み干し、次のビールの缶に手を伸ばした。

「んーじゃ、次。鳴本に第二とか第三とか言ってたよね。あれって何を指してるの？」

「ゲームで言うレベルだよ。今使える魔術レベルな。一から始まって数が増えることに強さが増していく。今現在見つかったのは第二十な。解りやすいようにレベル二十って言っておくよ。因みにお前のレベルはゼロな。第零。魔術使ってないからな」

「ふーん」

「俺達はこれを階級スベックと呼んでいる。第一階級、第二階級って感じな。解停って言ってもいいだろう。設定っていう意味も合っている。上がることに魔術も強くなる」

「つまり一レベル上がることに使える魔術も多くなるってことなの？」

「そうだ。使える魔法も色々あるからな。第、つまり魔術レベルが上がることによって使い方のバリエーションとか、範囲とかが広がるとかの特典があるから。使える魔法の種類、つまりお前が昨日見た炎を使う男、どんなのを使って攻撃してきた？」

大胡教師の質問に、トラウマになりかけた記憶を恐る恐る開封する。そして戦闘中に解析していた相手のデータを思いだして伝えた。

「まず炎の球を飛ばすとか。サイズはサッカーボールくらい。あと最後に炎の柱も出してた。太い木を一瞬で炭にしちまうほどの火力だった」

「ふん。一つの属性を連発で大小同時に放つか 第六階級っ

て所だな。そんなくらいなら都竹なら軽く倒せるか」

「へ？」

「あ、いや。何でもない」

都竹ちさとは図書委員会に行く途中で聖が出会った少女で、綾乃とはまったく正反対の性格の、おっとりとしていて、大人しくて優しそだった。その上スタイルが良く、隣のクラスだということで男子共の視線を集めてしまうのだろう。なのであのような人通りの少ない場所で本を読んでいたのだ。と図書委員会の集まりが始まる前まではそう思っていたのだが、都竹ちさはなんとこの高校のシルバ―ブリッツの一員であり、聖を待ち伏せていたのだ。

「都竹さんってさ」

「ん？」

「魔法使うの？」

「そりゃシルブリだからな」

「どんな魔法なの……シルブリ？」

「シルバールブリツの略。俺が考えた。長くて言いにくいんだよな。皆は真面目にシルバールブリツって言ってるけどさ」

つまみの一つである鰯の開きを平らげ、開封して二分も経っていないのにも関わらず三分の二も減っていたビールを最後まで飲みきる。大胡教師の顔が少し赤くなっていた。

「聖、シメちよーだい」

「ん。ちよつと待ってて」

上記にある通り、シメとは椎茸のバター醤油ソテーのタレを温め、少し薄めて炊いた米にかけて出すのだ。聖も祖母と何度もこれを食べていた。純粹に旨いと思う。少し下品だが祖母はそんなのお構いなしに醤油ご飯を啜っていた。

「おっほう。これこれ」

顔を赤くした大胡教師が恐るべきスピードで醤油ご飯を吸い込む。その間に空いている食器を下げて水に浸した。

三分も経たない内に大胡教師は醤油ご飯を平らげ、丁寧に聖が立っている台所までそれを持ってきた。

「ごっそさん。お婆ちゃんの味を受け継いでんなあ。将来良い嫁さんになるよ。お前は」

「大兄い、僕は男だよ。まあそんなこと関係なく台所に立つけどさ」

大胡教師から食器を受け取り、水に浸す。もう片方の手にはスポンジが握られていた。

一方大胡教師は聖の皿洗いを見ながら換気扇を回し、Yシャツの

中から煙草を出して、棚の上から灰皿と備え付けのライターを摘まんで煙草に着火し、紫煙を燻らせた。

台所は決して広い訳ではない。三人並ぶと動けなくなってしまう程のスペースだ。なので見ないつもりでも視界が狭いので、聖の皿洗いが見えるのだ。手慣れた手つきで皿の洗浄を終わらせる聖は、平和そのものだった。

大胡教師はどこか悔しくなり、少しだけ奥歯を噛み締めた。

「なあ聖。ごめんな、お婆ちゃんが亡くなって、落ち着きたいだろうに。シルバールイツなんぞに関わらせちまって」

「……………」

「守ってやりたかった。お前をな。お婆ちゃんが亡くなった後、そうお婆ちゃんから頼まれた気がしたんだ。お前は見た目に以上に腕っ節が強いしから一々守らなくてもいいんだろうけど、困った時に助けてやってほしい。そんな感じ。けど中学生の時にお前の適正を知ったからな。その時、俺の目が届くあの高校を受験させようと思った。だから俺もあんなに必死になって勉強教えたんだぜ？ なのに昨日は本当にごめんな。俺が先回りして色々説明してやれば良かったんだけど、昨日はあの煩い校長を説得するのに時間がかかったってな。月波がフォローしてくれたから何とかなったが、無ければお前はやられてた。だから本当に今、お前がいてくれて俺は嬉しいよ」

確かに昨日は死んだと思っていた。けど生きていた。綾乃のフォローなんてあったもんじゃない。

昨日の窮地を脱出したのは、聖の実力だというのか。

「だから今日は魔法について説明してやるから。これで不安とはおさらばしようぜ」

すでにフィルターギリギリまで灰に変えた煙草を灰皿に押し付け、換気扇を止めた。すでに聖の皿の洗浄は終わっている。二人は聖の部屋へ向かった。

「これが基本のカード。第一解放で使えるカード達だ」

聖の部屋で二人は床に座っていた。季節は春なので薄いカーペツトを敷いてある。その上には数枚のカードが広げられてあった。全て第五教師の懷から出されたものである。

「ファイア、アクア、リーフ、サンダー、ライト、ダーク、ストーン、エア―ってな感じ。まだ色々あるんだけどそれはまた今度小泉あたりに聞いてくれ。あいつなら色々教えてくれるから。解放状態つてのは リストバンド出してみろ」

大胡教師の指示通り、右ポケットからリストバンドを取り出す。

大胡教師はそれを手に取り聖の左腕に付けた。

「腕輪の発動の仕方な。リストバンドを左腕に付けたら右手で覆うようにリストバンド全体を掴み、左に回す。これで腕輪が出現するやつてみる」

大胡教師が左手を右手で回したので、それを真似してリストバンドを左に回した。すると左腕のリストバンドが一瞬で変化した。淡く光ったと思えば、鈍い銀色の光沢を放っていた。昨日の腕輪とは違う。変化したのだ。物質の変化を素肌で感じた。外側は金属の感触だが、内側は綿のように柔らかい。しかし質量はあるようなので、ずしりとした重みを感じた。三キロ程の重量だった。

「カードのことは聞いているな？」

「月波さんから聞いたけど、よく解らなかった。破いて珠にしたけど、魔法なんて出なかったし」

綾乃の名前が出た途端に大胡教師の顔が引き攣った。大胡教師も綾乃には手を焼いているらしい。

「あー月波は説明なんてするより実戦で教えるからなあ。月波は才能があつてな。シルブリに入つてすぐに強くなりやがった。一年生は実戦に入る前に何度か二年生と三年生に教えてもらうもんだが、月波の場合はセンスですぐに身に付けやがった。俺が見てきた中で二週間という短期間であれだけ階級を強くした一年生はいない。月波は腕輪を付けた時点で第四階級だった。まずそんなのありえないんだ。それから一回だけ小泉のレクチャーを受けただけで実戦に出て、第四階級のまま第五階級の一人を三十分かけて倒しやがった。それで次の実戦に出たら第八階級に成長していた。それで今は第十階級。普通二週間って言ったら一年生なんてろくに使い物にならないんだ。二週間で第一階級に上がれるか上がれないかだ。隼人は今第二階級なんだけど、まだ実戦には出せない。通常が通用しない奴らなんだよな。けど一人だけ異質な奴がいる。月波よりも解せない奴だ」

大胡教師の視線は明らかに聖に向けられている。固唾を呑んで、震える声で答えた。

「ぼ……僕、なの？」

聖の手が震えていた。綾乃の話がどれだけ通常平均値を超越しているのかは大胡教師の説明で十分理解出来たし、あの強気な態度と

昨日の闇の森林での落ち着きはそれから来る自信だったのだ。しかしそれを超える事態が起こった。

図書委員会で綾乃に説明された通りなら、それは

「そうだよ聖。お前の異常とも言える戦闘力。月波は第四階級の時、第五階級を倒した。けれどもお前は、お前は 第零階級で、誰の援護も必要とせずに第六階級を倒してしまった。これはシルブリでも未だに起こった事が無い大逆転だ。 確か戦闘が始まる前に月波にカードを渡されたよな？ 月波の階級で使えるカードをお前が使える筈が無いのだが、それ以外考えられない。一体どんなカードを渡されたんだ？ カードの名前を覚えているか？」

切羽詰まった表情で大胡教師が迫った。その顔に酔いはない。純粹な疑問を解決するために聖を問うたのだ。

聖もカードの名前を覚えている。名前が簡単だったこともあるが、使えなかったという点が大きなインパクトになったのだろう。鮮明に覚えていた。

そしてそのカードの名前を大胡教師に告げると、大胡教師は天地が引つ繰り返ったかのような、しかし納得した表情で呟いた。

「アーツ 灰色のカードだった」

「やっぱりか！ いや、アーツはシルブリの数少ない物理攻撃が可能な魔術なんだ。成程、それなら第零階級の聖でも扱える。考えたな月波め」

「アーツってそんなに強い魔術なの？」

「いや、とても弱い」

なるほど。これがスベるというリアクションなのか。と聖は盛大に額を立てていた右膝に叩きつけた。

ここまで素直に答えられると、僅かに抱いていた期待が一気に崩

壊するというものだ。

「魔術師が使ったら弱いな」

「え？」

「要は使い様だ。魔術に頼り切った魔術師　シルブリが、いきなり物理的な打撃系武器を使って攻撃しても、使いこなせるものか。例えるなら英語しか学んでなくて検定で一級まで上り詰めた奴に、いきなり中国語を話してみる。なんて言うのと同じさ。けどな、普段から物理的な打撃系武器しか使ってこなかった聖が使えば、シルブリよりまともに　いや、互角かそれ以下な戦況に持ち込めるはずなんだ。勝率が零パーセントだったのがいきなり五十パーセント以下にまで膨れ上がる。これは大きい」

「けど、僕がそう簡単に第六階級を倒せる訳が無い。奇跡でも起きない限り」

「そう、そこだ」

大胡教師が懐から出したのは名刺入れだった。そこからカードを出したのだ。

そして名刺入れの一番下にあったカードを出し、聖の前に置いた。指で突いて聖を少し睨む。

「どうして勝率五割以下の聖が、第六階級なんていう奴を倒せたか。今聖が言った通り奇跡でも起こらない限り無理だ。けど奇跡なんてそうそう起こるもんでもないし、ポンポン起こられても困るだけだからな。だから推測するに、奇跡なんて起こらなかったんだよ」

大胡教師は聖を睨みながら続けた。いつしか聖の額には汗が浮かび、頬にいくつかの筋を作っていた。

顎から伝わり落ちる汗がアーツのカードの端あたりに落ち、弾けた。小さな水の塊なのに、やけにはつきり見えた。弾けた瞬間のさ

らに小さな粒となつて飛散する時の一粒一粒の全てが肉眼で見る事が出来た。極度の緊張感からくる感覚なのだろう。

「全てはお前の實力なんだよ聖。

やっぱりお前、意識

熔暗^Fができたんだな。もし本当にCFOが使えたらならば、勝率は九割以上に膨れ上がる。……この仮説が事実なら、事態は納得が出来るな」

「CFO……？」

「Consciousness Fade-Out の略だ。

図書室で話したろ。無意識の内の戦闘について」

聖が恐れた事だった。意識を無意識に移行して戦闘を行うことだった。と言つても昏倒する程意識を失うのではない。感覚や意思を忘れてしまうのだ。排除と言つてもいい。自身の身によほどの危機が訪れれば発動が可能になるが、意思がないため無差別で攻撃してしまうのだ。それが一種の暴走とも言える。

無意識は恐ろしい。意思がないため感情がない。情もなければ喜怒哀楽もない。恐れも無い。そしてなにより感覚がない。痛覚がないためダメージによる怯みがない。身体の限界から来る筋肉などの悲鳴も気にせずに戦える。体力が空になったとしても苦痛がないので無制限に戦える。情が無いので相手が動けなくなるまで、動かなくなつても拳を振るえる。

「実はお前は一度だけCFOになったことがあつてな。小学三年生の時なんだけど、覚えてるか？」

「い、いや……覚えてない」

「だろうな。いや、そこまで酷い話じゃないんだけどな。お前が小学三年生だった頃だから九歳だったな。俺が二十歳、大学二年生の時だったな。季節は秋だったんだが、本当に覚えてないのか？」
「うん」

本当に覚えていないのだ。いや、そのことに関しては無理もないだろう。無意識なのだから記憶そのものがないのだ。覚えているはずがない。

「このCFOを取り入れたアーツで灰色ローブの男を倒したのか。

苦しいだろうけど、戦力として取り入れられたのなら、シルブリ五人くらいの戦力を得られるな」

ぶつぶつ呟く大胡教師をじっと見つめていた聖だが、汗を拭って肝心なことを聞いた。

「ねえ大兄い」

「ん あ、ああ。何だ？」

「僕はまた、あの戦場に出なければならぬのかな？」

それが一番聞きたかった。答えはある程度予想できている。それを理解した上の質問だった。

「 怖い、か？ 聖」

大胡教師がゆっくり問う。

「……うん」

聖にとっては命を落としかねなかった。トラウマだ。

「 戦いたく、ないよな」

「……うん」

数秒の沈黙が訪れる。痛々しい顔で大胡教師は俯いた。
そしてゆっくりと頭を下げた。

「ごめんな、聖。あんな怖い思いしたんだもんな。それにお婆ちゃんがいなくなつてそんなに経つてないのに……俺が悪いんだ。守つてやるつてお婆ちゃんにも、墓前でも誓つたのに。昨日は守れなかった。なのにお前は頑張つて足掻いて戦つて、結果を残してくれた」

痛々しい表情がさらに苦悶に震えるように歪む。

「今回の件で謝ることは沢山ある。けれど解つてくれ。戦わなくては守れないものもあるんだ。身勝手なのは解つてる。でも皆守りたいものがあつて戦つてるんだ。それを理解してくれなんて言わないけど、どうか無駄にしないほしい。シルブリとして戦いに参加してくれと強制はしないよ。戦いに参加しないんだったら、卒業まで他の教師や、校長からだつて俺が守つてやる。だから考えてほしい。シルバリーブリッツを。シルバリーブリッツとして戦つて、何を守るのかを考えてほしい」

頼む。と大胡教師は頭を下げて頼んだ。

聖はただ、無言で大胡教師の頭を見下ろしていた。

月が似合う少女 ？（後書き）

いつもなら爽やかな朝として気持ちよく起きれるはずだった。なのにあの一件があっただけで朝がくるのが鬱になるほど嫌になってしまった。一日中ネガティブになりそうな聖に、綾乃はこう言った。
「何その顔。蹴り殺すわよ」

月が似合う少女 ？（前書き）

守る理由があれば何にだって戦える。そう思っていた。だがいきなり血みどろの戦場に放りだされて「考えてくれ」と言われてもこちらが困るだけだ。

しかし教師はさらに行動に出た。言葉で駄目なら、行動で示そう。と

月が似合う少女？

朝は好きだった。窓を開けて爽やかな風と朝日を感じるのだ。部屋の空気の入れ替えて温まっている部屋の空気を追い出し、新鮮な空気に入れ替える。

そして軽めな朝食を食べて走りながら高校へ行き、部活の朝練に参加するのだ。

聖の身体能力は高い。レベルで言えばそこそこ鍛えた高校三年生くらいだろう。それでもまだ技術が足りないため、鍛えた高校三年生には少しだけ及ばないのだ。特に部長の冬峰雪歩という少女には勝てないでいる。彼女は武器の扱いに長け、さらにそれらを失った際の対処法も知っている。なので素手で聖とスパーリングを行っても片手で制してしまうほどの実力者なのだ。

聖は雪歩を目標とし、また超えるべき壁として彼女を尊敬し、憧れた。無敵武道部の部長として凜とした戦いを行う彼女は美しかった。容姿も整っていて文武両道な彼女は同学年から後輩まで人気があり、教師達からの信頼もある。無敵武道部がネタ部として廃れないのも彼女が仕切っていることが理由として妥当なところに入らるだろう。

聖は今日も、昨日の自分よりも少しでも強くなろうと努力するために朝早く家を出る。朝食を食べた腹は落ち着いていて、多少動いても吐き気を催すこともないだろう。

昨日、大胡教師に言われたことがやはり気になった。今それを引きずっていないと言えは嘘になる。気持ちに少しの乱れを感じた。このままではいけないという自覚はある。だがどうしようもない。聖がそれを引き摺り、情のままに大胡教師に従ってシルバーブリッツとして戦いに参加していいのだろうか。

それでは駄目なのだ。自分の意思で動かなければならない。もうすでに聖には血の繋がった家族がないのだ。叔父も叔母もない。

親戚は祖母を嫌っていて、祖母に気にいられていた聖をよく思っていなかった。なので祖母が亡くなっても表では言葉だけで慰めても、何もしてくれなかった。

生活面はどうにかなる。大胡教師がいるので他のことも助けてもらっている。だが聖は一人なのだ。暗い家で一人で寝る。誰にも挨拶することもない。高校の成績で褒められたりしない。夜遅く帰ってきて怒られたりしない。偏った食生活をして何も言われない。誰も掃除をしてくれない。一人では広すぎる家に、人の温もりがない。大胡教師や同級生や友人がいる時には決して顔には出さないが、夜に一人で泣いていたこともある。孤独に一人で戦っていたのだ。

しかし今はそれもなくなくなった。無敵武道部とある再会をした。それこそ冬峰雪歩なのだ。彼女も幼い頃、聖の祖母に武道を習った事がある。祖母は実戦的な格闘を好んだ。一般的にはそれを喧嘩ともいうが、決して人は殺さずの信念の元、一応スポーツマンシップに則ってはいたが、型破りな戦術で相手を翻弄するやりかたに雪歩は惚れていた。彼女は幼い頃、それはそれは非力で、それを嘆いていた。基礎から武術を学んでも基礎通り動いてしまう。それが別に悪い事ではない。むしろ基礎が働くのは最良なのだが、それ故に負けてしまう。相手も決して基礎通りに動いてくれるとは限らない。ルールを守らない場合もある。

雪歩が小学四年生の時からだったか。雪歩は男子から虐められていた友人を庇う度に拳を振るうが、結局は囲まれてしまう。結果は解りきっている。

そしてある日、雪歩は聖の祖母と出会った。雪が降っている冬の日。クリスマスが近くなつて来た頃だろうか。また男子から友人を庇い、囲まれている時だった。聖の祖母は雪歩を見て、にっこりと笑ったのだ。そして雪歩の視線に気付いて他の男子が祖母に気付いた時には、祖母は男子の一人の背後に立っていた。そして叫ぶ。「カァッ」と怒鳴った。するとあまりの剣幕と迫力に驚いて男子達は逃げた。

その光景を見て驚いている雪歩と、慌てて逃げる男子達の背中を面白そうに声を上げて笑う老婆。祖母は一通り男子達を笑った後、雪歩にこう言った。「ルールなんて、糞喰らえさ。あんたは基礎とルールを大事にしてるんだろうけど、実戦じゃ通じないよ。もし本当に強くなりたいんだったら、いつでもいいからあたしのところにおいで」

明るい笑み。乱暴だが暖かい言葉。雪歩はこの言葉に打たれた。次の日から教えられた家に行く。祖母に会うつと、空き地で武道を習った。その時に聖と会ったのだ。

そして数年後、聖と雪歩は再会した。雪歩は中学二年生まで祖母のところまで武道を習った。中学三年生になる頃には雪歩の高校受験があるので、祖母もそれを理解していた。ほとんどを教えたと言つて「合格」と言い渡した。

あれから無敵武道部で雪歩は頑張っていたのだ。そして聖もそれに入る。再会した時はどれだけ嬉しかったことか。血の繋がった兄も姉もいなかった聖にとって、雪歩は姉のような存在で、雪歩も聖を弟の様に可愛がった。組手の時は容赦はしなかったが、それでも大事だった。

聖が無敵武道部に入った時、大胡教師とで一緒に面倒をみてくれると言ってくれた。

寂しさが薄れ、暖かい夜を迎えられた時はどれだけ嬉しかったか。なので今日も聖は無敵武道部の朝練習に向かう。雪歩に会う事も楽しみだったし、体を動かす事に喜びを感じたいからだ。

「お早うございます」

いつも通りに走って朝練習に参加する。部室の他、道場の貸出も得ているので遠慮なく練習出来るのだ。

朝早いと外界よりも少し暖まった空気を吸う羽目になるが、良いこともある。特に一番乗りだと気持ちがいい。埃が舞っていないのだ。誰一人として数時間触れなかった道場に裸足で踏み入る。そして道着に着替え、シンと静まった道場で軽めの体操をする。

そして拳を握った瞬間に空気が変わる。暖かい空気がキンと冷えたような、緊張の糸が張り詰めたかのような。そんな中で拳と脚を振るう。それが気持ちいい。

だが今日は違った。いつもなら先に先輩が二人くらいはいるのだが、今日は一人しかいなかった。二人の中には必ず雪歩がいる。が、そこにはのは雪歩ではない。聖は少し驚いて、呟くように名を呼んだ。

「大兄い……？」

そこにいたのは、いつものように遅れてやってきて、珍しくジャージではなくて道着を着ていた大胡教師だった。

「待っていたぞ。聖」

大胡教師は静かに口を開く。その眼は畳みを見ていたが、顔が持ち上げられると共に聖をしっかりと見据えた。

おかしい。何かが違う。聖は直感で違和感に気付いた。まず空気が違う。いつもように柔らかい物腰は消え失せ、氷の様に冷たい視線で聖を見ている。何よりいつもなら「学校では先生だろ」と注意

をしてくるはずだ。なのにそれがない。

「道着に気がえる聖。準備は一分で済ませ」

いつもとは違う大胡教師に少し焦りながら、聖はゆっくりと鞆を降ろして中から道着を手取る。

「大兄い。何を怒っているんだよ。 もしかして、昨日のことなの？」

だとしたら少し厄介だ。少し不安に思いながらシャツを脱ぐ。返事を待つと同時に着替えているのだが、大胡教師の返事はない。聖を見て黙っていた。

気味が悪い。口にしようとしたが、怒られると思って黙っていた。

「……………大兄い」

「早くしろ」

一蹴。何かを言おうとしたが、ぴしゃりと遮断された。

渋々と道着に着替え、鞆と制服をいつも置いてある場所に置いて畳の上にあがった。帯を少しきつくして大胡教師の前まで歩き、対峙した。

「どういつつもりなの？ いつもならあまり来ないのに、今日に限って早いね。しかも道着って……………僕と組手するつもりなの？」

聖が問う。しかし大胡教師は答えない。その代わりに拳を握って構えた。

「え……………大兄い？」

「構える聖。五秒経ったら始めるからな」

「は ちよつ」

五秒後、宣言通りに大胡教師が攻撃を開始した。鋭い蹴り。裸足とは思えない攻撃力。ヒュンと空気を斬って迫りくる蹴りを、聖は上半身を捻って回避する。が、爪先が微かに鼻先に当たっていた。それだけなのに、まるで刃物で切り付けられたかのような痛みが鼻の奥でした。掠っただけでこの威力なのだ。

「大兄い 本気なのか……？」

回避したことによる急な体重移動に対応するため、二歩下がりがから体を回転させる。そして素早く振り返って構えた。大胡教師は本気だ。本気で拳を振るって来る。祖母の訓練に大胡教師も参加して教わっていた。それこそ雪歩よりも早くから、そして長く続いていた。なので組手もしたことはあるし、大胡教師の実力も知っているつもりだ。

だから油断出来ない。大胡教師もまた、聖が勝てない内の一人なのだ。

昨日、真剣に考えてくれと言われた。そしてその答えを拳にしる。ということなのだろう。いつの時代だよ。と突っ込みたかったが、今はそれどころではない。兎に角迫りくる大胡教師をどうにかしなければならぬのだ。

「しっ」

大胡教師の連続蹴り。下段から上段まで一瞬で蹴って来る。どう蹴って来るのかは軌道を読めば解るので、下段は右足で、上段は右腕で防ぐ。衝撃による振動を逃がし、聖は反撃に出る。

大胡教師が連続蹴りを終えて足を引っこめる瞬間、それに合わせ

て聖の一步前に出る。右腕を曲げて肘を突き出した。だがそれは同じように突き出された大胡教師の左腕の肘で突き合いになり、次撃の曲げていた腕を拳を握って振るうことも同じ、突き合いになった。ならばとばかりに聖は左手の指を揃えて伸ばす。腕を後ろにやり、振り子の様に威力をつけて突きだした。聖の得意技は蹴りと手刀だ。

「甘いんだよ聖」

何と、避けられた。大胡教師は左腕で聖と錨迫り合いをしているというのに、体制としての重心を崩さずに右足を引き、聖の左手の手刀の軌道を読んで回避したのだ。反射神経からくるもので、どんな素早い攻撃にも対処できるようになっている。

「ちいつ」

舌打ち。突き出し切った左腕を回収すると今の聖のように逆に接近されて反撃を貰ってしまう。なので錨迫り合いをしている右腕の肘で大胡教師の左腕の肘を弾き、こちら側に大胡教師の重心を崩して誘導させる。たった今重心を移動させたばかりなので、まさかその直後に強制的に再び移動させられるとは思っていなかったのだろう。あっさりと大胡教師は聖の正面に倒れて来た。だがそれだけでは反撃されやすい場所に移動させてしまっただけだ。聖は考えもなしにそんな行動はしない。

「もう昔の僕とは思わないでほしいね」

同時に左腕を回収したのだ。そして自身も大胡教師と同時に回転して背を向ける。互いが背を向け合ったという立ち位置になる。そこで今回収めた左腕を使う。遠心力と筋力をフルで使い、大きく弧を描いて薙いだ。これなら隙も無く相手の死角を突ける。とあって

いた。

バシンと乾いた音がする。聖が驚いて息を詰まらせた。大胡教師の右腕が後ろに回され、聖の腕を肘で突いたのだ。それも聖の肘を突いた。それによって衝撃が分散されて薙ぎが止まってしまふ。

「昔の僕と、何だつて？」

眦がビリツと動いた。嫌な予感がする時は決まって動く。次の直後、両足に鋭い衝撃が走った。背後にあつた大胡教師の気配が消える。背中越しに姿を確認してみると、視界の下の方に黒い糸が見えた。それが大胡教師の髪だと解った時には、視界が百八十度回転していた。

足を払われた。このままでは頭を思い切り打ってしまうと、先に危機を感じていた聖はもう動いていた。右腕を伸ばして畳みに掌を叩きつける。一瞬だけ体が持ち上がり、今自分がどういう状態で宙に浮いているのか把握すると、一番安全なルートを見出して転がった。受け身をとったのだ。

二回転がると、約二メートル程の距離を取れた。受け身を終えて体制を整える。そして前を見ると、逃がさんとばかりに追撃を始めようと大胡教師が接近を始めようとしていた。

聖もそれに応じる為に両足に力を入れた。

こうなれば全力で応じるしかない。言葉が通じない今、戦闘で大胡教師を黙らせる他はないのだ。

「つえいあつ！」

右足を踏み出すと同時に体を左に回転させる。先程の左腕の薙ぎと同じ要領で左足を薙ぐ。今度は遠心力と筋力で上段を薙ぐ。鋭い薙ぎだが大胡教師はそれを急ブレーキをかけた上で上半身を後ろに反らして回避する。しかしまだ終わらない。回避された左足はその

まま元の位置に戻ることもなく、もう一度一周させて今度は下段を払った。

しかしそれさえも大胡教師には見抜かれていた。軌道が単純な下段払い、三步のたたらを踏んで後退しただけで避けられる。そして大胡教師は三步の距離を一步で詰めて来た。つまり反撃に移ろうというのだ。

一気に距離を詰められた聖が反撃に対応しようと、まだ宙に残っている左足を無理矢理回収して後退する。このままでは体当たりと同時に両の掌からくる掌底を叩き込まれる。これらの掌底は手首を付けて回転させながら叩き込む。聖の祖母の得意技の一つである双弾砲と呼ばれる闘技。

これを危惧しながら両腕を揃えて防御を試みるが、大胡教師は双弾砲を放つとその防御の両腕を容易にこじ開け、聖の胸に掌底を叩き込んだ。

「ふっ……ふっ」

双弾砲の衝撃は胸板を突き破り、体内を揺さぶり荒らした。肺の空気を無理矢理押し出され、心臓の鼓動さえも止まりそうになる。呼吸をしたかったが肺が潰されて吸いこめない。酸素が不足することにより意識が朦朧とし、足がガクガクと震える。

とどめに大胡教師は自身で体当りを決めた。足腰肩を同時に使った、一番力が入り易い体勢で無防備の聖の胸に体当りをした。大胡教師よりも小柄な聖は当然大胡教師よりも体重が軽い。そのために次の瞬間には大きく吹き飛んだ。三メートルは宙に浮き、次々とバウンド音を響かせて壁に叩きつけられた。

背中から壁に突っ込んだので、足をズルズルと前に出し、床に座る形でやっとなまった。

「聖 ここからだろ。お前の力はここからだ」

力無く俯いている聖に話しかける。意識が失われているかは解らない。

「あのお前は丁度、こんな感じで意識を失っていた。そして群がる相手を一掃した」

ピク。と聖の指が動く。

「あのお前を、もう一度俺に見せてみる！！」

ゆらり。と聖が立ち上がる。生気を感じられないような立ち上がり方だ。

直後、大胡教師の背筋に悪寒が走る。これは純粋な恐怖からくるものだった。聖という普通の人間から化物を取り出してしまい、その化物が大胡教師に牙を剥いたような。

聖は今、意識熔暗^{CHIO}を発動してしまったのだ。

月が似合う少女 ？（後書き）

意識がないということは厄介極まりない。なのにこの教師はあえてそれに挑む。意識を失って感情を排除した少年は、まるで野獣のよう
に教師に襲い掛かる。
その真価は、いかに
！

月が似合う少女 ？（前書き）

目の前が紅に染まり、抗えない破壊衝動が心を蝕む。自分の中で静かに眠っていた化物が眠りを覚まさせた愚か者を制裁するために牙を剥く。

駄目だ。その人は大切な

！

月が似合う少女？

冷えた空気が暖まってくる。日差しによるものかと思いきや、道場で拳を振るいて脚で舞う二人の熱気によるものだと思いつくのに何秒要したのだろう。いや気付くはずもなかった。気付ける余裕がなかった。

大胡教師は目の前でメリメリと筋肉を鳴らしている化物少年は、目の前にいる自分を深い眠りから目覚めさせた愚か者をどうしてくれようかと爪を鳴らし、牙を尖らせた。そんな化物を大胡教師は目覚めさせてしまったのだ。自らの拳で。化物の力量を見定めようとしたが、これでは十分に計れるかどうか解らない。それどころかそんな余裕があるのかも解らないのだ。

「だけど、怯む訳にもいかないよなあ」

苦笑いを浮かべて聖の様子を伺う。出方次第で何通りの対応が可能だが、それは人に対応する術だ。

相手が化物では人と同じ対応で通じるかどうか、不明なのだ。

「う　　あ」

生気が感じられない虚ろな目をしている聖は、その表情とは裏腹に熱い息を吐いていた。それほどゆっくりとしている呼吸は、まるでドラゴンが炎を吐いているかのようだった。

そして大胡教師が様子見故に少し爪先を動かした時だった。

聖の姿がその場から消えた。大胡教師の視界から完全に失せている。違う。肉眼で視認出来る範囲を超えて移動しただけだ。気配はそこまで動いていない。なので横には移動していない。下に移動したならば必ず視認できるから気付く。

だとしたら、

「凄いな。魔法を使っていないのに、人間の筋力でそこまで跳躍を可能にしているとは」

驚いて上を見る。そう、聖は大きくジャンプしていた。大胡教師には見えないほどの筋力を撓らせ、高速の跳躍を見せた。

聖の背後には窓がある。その位置は三メートルほどの場所にあり、普通は開けない。なので淵を掴むのは簡単なのだ。だが三メートルもの距離を跳躍できるはずがない。しかし聖は簡単にやりとげた。三メートルの跳躍の後に淵を掴んで壁に足の裏を付けて再び体制を整える。

直後にダンと空気が鳴った。足の裏で壁を思い切り蹴った音が空気を振動させた。まるで大砲のような音量と空気の圧力。聖は大きく宙を舞う。

「後ろか！」

大胡教師の頭上を通り過ぎる。が、落下角度が異常だった。放物線を描くと思いきや、放物線の半円の頂点を通り過ぎてからカクンと九十度、軌道が変更された。まるで射ち落とされた鳥のように。何が起きたかと疑問に思ってからそれを理解する時間さえ大胡教師には与えられなかった。考える暇を無理矢理詰めるように聖が攻撃を喉けたのだ。まだ着地から体制も整えずに攻撃に移った。畳の上には肩から落ちた。首と後頭部の衝突を受け身の様な物で防ぎ、両足の爪先を床に付けると同時に跳びかかって来た。

「くっ………」

聖は右腕で手刀を突きだした。その速度は意識がある時の三倍はある。これを左腕で受ける。道着越しでも物凄い衝撃だった。素手

で受けていれば皮膚が破けていただろう。

突き出した手刀は戻さなければ次の行動に支障が出る。大胡教師はそこで再び反撃しようと思っていた。だが聖の行動に目を見開いた。右腕を戻すと同時に左足を踏み出して左手の手刀を突きだしてきた。

つまり攻防一体の戦術。追加効果として一步前に出て距離を詰めるという、自分の立ち位置を優位にできる。

「お婆ちゃんの戦法、こんなところで真価を発揮するなんてな……！」

詰められた距離を離す為、大胡教師は今までの二倍の力で畳を踏みつけて五歩後退する。その五歩は細かい足取りでとにかく速い。二メートルほどの距離が開く。しかし聖はすでに左手の手刀を突きだした直後だというのにそれを収納せずに突撃を開始した。大胡教師が五歩で後退した距離を二歩で埋める。その方法は飛び跳ねて回転し、脚を薙ぐ蹴り。移動と共に攻撃する。

「ちいっ」

回転脚を膝を折って半身になって回避すると、聖が着地した直後に右足を翻す。半身の状態で滑るように聖の懐に潜るともう一回転して両足を蹴り飛ばそうとする。

しかし大胡教師の足払いが当たる事は無かった。手応えが無い。聖は再び宙に舞っていた。三メートルは跳んだだろう。人間の筋力の限界を超えた様な動き。獣のような身体能力。受け身を取らずとしても攻撃に移れる精神。異常だった。

これが聖の能力。意識、いや理性そのものがないのだろう。故に痛覚も気にならない。眠っている時に脚を抓られても、抓られた側は何も覚えていないのと同じ。今の聖は半分眠っているのかもしれない。そしてその半分は人間が獣だった時の原始的な攻撃本能が呼

び起こされているのか。確かにこれは普通の人間が相手を出来るはずがない。理性がない獣、例えば極限な空腹に苛まれているライオンを相手に素手で立ち向かっていくようなものだ。しかし聖は空腹なライオンではない。化物だ。祖母に鍛えられて教わった戦術が体にしみ込んで無意識の内に使っていた。それがなければ今頃噛みついて攻撃していただろう。

ならばこれを鎮める方法は数択に絞られる。その内でも最も最善な方法を選択した。

「お前の能力は見せてもらった。でもこれが限界じゃないんだろうな。ほんの一部。……でもそれが解ったからそれでいいや。悪かった、眠ってくれ」

呟いて聖との距離を一気に詰める。攻撃を出した後だったので、聖は全力で突き伸ばした手足を引く事が出来なかった。

「ぐ……がつ？」

言葉にならない呻き。大胡教師を睨み、もう引いても間に合わない手足を諦めた。首を後ろに撓らせて、額を後ろに引く。頭突きだ。

「もう遅い。諦めてくれないか」

頭突きが放たれることはなかった。

聖が頭突きを放とうと奥歯を食い縛り、肩を前に出し始めた時には大胡教師の右手が聖の鳩尾を穿っていた。

「おぼっ………っあ？」

ガクガクと震える膝。空気を求めて開いた口腔から涎が垂れる。

震えが体全体に広がった時、とうとう聖は意識を手放した。

「ごめんな聖。痛かったよな」

完全に意識がない聖を優しく抱えて畳の上に寝かせる。他にどこにも怪我がないか確認して、ようやく大胡教師は緊張を解いた。大胡教師は武術に長けているのだが、聖を相手にする時は余裕がなくなってしまう。そこには決して情は無い。つまり聖が日々成長しているということだ。

「俺を超える日は近いかな」

苦笑いを浮かべ聖に手を伸ばした時、遠くから聞こえる複数の足音に気付いた。朝練習をしに来た部員達だろう。

この状態を見られるのはちょっとまずいので、大胡教師は急いで聖を抱き起こすと、その行動とは裏腹に乱暴に肩に担いだ。

直後に道場の扉が開く。

「お早うございます大胡先生。って、聖と何してたんですか？」

そこには無敵武道部の部員全員が揃っていた。皆の目の前には可愛い一年生がボロボロになり、それが顧問の教師に担がれている始末。人数は少ないものの、二三年生は全員聖を気に入っていたので、そんな聖が気を失っていたら心配になる。

「大胡先生。今日は確か道場の点検で三十分朝練習を短縮して、遅れて来いって言ってましたよね。それが何で聖をボッコボコにしているんですか？」

堂々と胸を張って意見するのは冬峰雪歩だ。聖を弟のように想う

雪歩にとってはこの事態の詳細を知りたいところだろう。だが大胡教師は一切の説明をせずに道場を後にしようとすた。

「詳細、後で聞かせてもらいます。大胡さん」

「まあ、後でな」

道場の暖まった空気が二人の言葉の剣で再び冷却されてしまった。雪歩の睨みと口調は刃の様に大胡教師の背中に突き立てられたのだが、大胡教師は背中越しにその殺気を感じとり、紙一重で回避した。そしてそのまま部員達を割らせて道を作り、道場を出てしまった。道場にはしばらくの沈黙が続いた。痛い程の。

「部長、あれって……」

二年生の女子が雪歩に話しかける。が、雪歩は首を振って言葉を中断させた。

「多分アレでしょ。一年生の実力を計りたくって、二人きりになったんだけど緋之くんが力み過ぎて何かの拍子に頭ぶつけて気絶しちゃったんでしょ。」

さ、先生はもう行ったし。私達は私達で朝練習を始めましょ」

雪歩自身も心配と不安で満たされていたが、今は皆を統率しなければならぬ立場なのだ。私情でいい加減な訓練をしてはいけない。それは理解していた。

なので今は自分の中にある余計な物を押し殺し、皆を纏めて朝練習を始めた。

少し暖かくて、甘い香りがした。これは女性が使うシャンプーの香りだ。あまり派手に香りを振り撒かず、控えめにした香りは近づく程に強く感じるタイプのもの。

つまりこれだけ香ると言う事は、そのシャンプーで洗った髪と顔が聖の顔の近くにあるということになるのだが

「な、何で僕を見下ろしてるのかな」

まあそう言いたくなるだろう。起きてすぐに見たのが、自分を罵倒して「クズ」呼ばわりする、聖にとってはトラウマに近い少女の顔だったのだから。

月波綾乃が、むっすりとした表情で聖を見下ろしていた。怒っている。表情からして絶対に怒っている。別に何か怒らせるようなことをした覚えは無いのだが、なぜだか綾乃は怒っていて聖を気持ちの悪い羽虫を見るかのような目で見下ろしてきた。

「…………クズ」

開口一番がこれだ。解っていたが。

「へ…………？」

解っていたのだが、聞き間違いかもしれない。それに賭けてもう一度聞き返して見た。

「このクズが。って言うてんのよクズ。まさか自覚がないとはね」

無駄に終わった。眉一つ動かさない綾乃は、さらに罵倒を続けた。

「何私を動かしてくれてるのよ」

状況が今一の見込めない。

綾乃から視線を外して周りを見る。鼻孔から入った匂いが医薬品のもので、今の聖は横になっていて、暖かいのは布団があったからだ。つまりここは保健室なのだ。

ゆっくりと起き上がり、額に手を当てて覚えている限り思い出すと、聖は確か大胡教師との模擬戦の中で意識を失った。その意識の失い方がまた特殊なもので、大胡教師に聖の八割の力で立ち向かったところまったく歯が立たず、大胡教師の表情もまったく変わらな。どこか馬鹿にされている様な気がして、今度は全力で拳を振るおうとしたら壁に叩きつけられた。ここからだ。ここから意識を失い始めた。

聖が壁に凭れ掛って尻もちをつくと、大胡教師が何かを言っていた。何の事かは解らなかったが、大胡教師の言葉らしき音が耳に入った途端、急に頭が発熱した。まっさらな布地にゆっくりと絵具が浸透していくように、聖の目の前が赤く染まっていく。気持ちが悪くなったが、そんな感覚まで溶けていった。

そして溶けた意識が次に何を思ったのか。記憶に手を入れてさらに奥深くを探してみる。

意識が水飴の様な粘りを保ちながらゆっくりと聖の下へ流れ出て行く。足元に意識という水溜りが出来たみたいだった。だがそんな考えもやがて水溜りへ落ちて行く。

そして意識の中に残ったのは僅かな思考。だがはつきりと覚えていた。強烈なほど、刻みつけられたように

「このクズ。どこまで私を動かしたら気が済むの？ 教室からここまで何百メートルあると思ってんのよ。この体力の無駄遣いをどうしてくれる訳
ねえ、ちょっと。聞いているの？」

罵倒を続けていた綾乃が、聖の顔色が急変したことに気付く。
何かを考えている表情から顔色が真っ青になり、瞳が虚ろになってくる。普通ではない顔で俯き、手を口元に持って行く。

「う っぷ」

両手で口を強く押さえる。今まで虚ろだった表情に生氣が戻ったが、それは苦痛によるシヨックからの影響であるものだ。苦痛、つまり吐き気。思い出した光景があまりにも衝撃的なものだったのだろう。

俯いてから急に体を痙攣させて呻くものだから綾乃も驚いていた。

「ちょ 吐くの？」

危機迫る様な表情と強く押さえた口元という仕草から察するに、綾乃も吐き気を催したと察したのだろう。幸いここは保健室だ。保健室には吐瀉物を入れられるようなものもある。保健室の隅には洗面台があった。そこには洗面器がいくつも用意されていることを思い出す。

「二十秒持たせなさい！」

下手に動けない聖が綾乃を見て、瞳で頷いた。綾乃は急いで洗面台に走ると、その上の棚に常備されているビニール袋とトイレットペーパーを力付くで取り出した。その衝撃でいくつか小者が落ちて

音を立てたが後で拾えば良い。洗面器にまずビニール袋を広げて敷いた後、トイレットペーパーを何重にも敷いて固定、聖の前に差し出した。

ギリギリ間に合った。手渡された洗面器に顔を押しつけるようにして口を開いた。

「まったく 間に合ってよかった」

最後だけは聖の吐瀉が落ちる音で掻き消された。

朝食の全てを吐きだしてしまった聖は数回咳をして息を整えると、手足が汚れていないか確認して、これ以上匂いが広がらないようにビニール袋の口を縛る。幸い洗面器には匂いが移っていなかった。さてこれをどうしようかと思っていると、綾乃が片手を差し出した。

「ほら。それ捨てておくから あんたはこれで口濯ぎなさい。匂いの元を断たないと消えないのよ。それくらい知らないの？」

相変わらず言葉に棘があるのだが、この行動には驚いていた。

まさか綾乃が聖の吐瀉物の始末を自分から名乗り出るとは思っていなかった。いくらビニール袋が汚れていないからとは言え、普通好意の欠片も無く罵倒だけする嫌われている存在なら、そんな役は嫌がるはずだ。それが綾乃ならばとても嫌がると思っていた。

なのに綾乃はビニール袋をしつかりと握る。そしてコップに注いだ水まで差し出してきた。気が効いている。「え？ あれ？」と想っている、綾乃はさらにビニール袋を取り出して二重にしてゴミ箱に入れた。その後はちゃんと洗面台で手を洗っていたし、保健室担当をされている先生が使っている机に今あった要件を書いて手紙にしていた。

一通りのことが済むと、また聖の元に戻って来た。

「濯いだのね。じゃ、コップと洗面台を渡しなさい。 った
く、なんで私がこんなことをしなくちゃならないのかしらね。この
クズ」

「ご、ゴメン……………」

確かに綾乃の言う事も一理ある。そんな関係でもないのに、ここまで世話をかけてしまった。まだ出会ってから三週間も経っていないで、そこまでキャツキャウフフな会話もなく、むしろトラウマを植え付けられたというのに。

いや、もしかしたら綾乃はその件を実は申し訳なく思っているのではないだろうか。

「このクズ。今度やったら蹴り殺すから」

洗面器を洗面台に叩きつけるようにして入れて綾乃はお決まりの暴言を高らかに言った。

またか。と少し落ち込むが、今さっきしてもらった恩を忘れるわけにはいかない。聖は「あはは」と苦笑いを浮かべた。

浮かべられた苦笑いを見下ろしながら「何なのコイツ」と呟き、綾乃は元いた場所に戻る。

今まで綾乃は聖が横になっていたベッドの脇に椅子を出して座っていたのだ。

ということは綾乃は聖が起きるまで待っていたというのか。時計を見る。一時限目はすでに終わっていた。二時限目に突入している。そんな時間になるまで綾乃はここに居続けたというのか。

解らない。月波綾乃という少女がさらに不可解になってきた。

「 大河先生と戦ったんでしょ？」

綾乃が口を開く。椅子に座ってからすぐだった。

「え？ あ、ああ」

「どうせ負けたんでしょ？ 大河先生、魔術でも使ったんじゃないかしらね」

「いや、大兄い 大胡先生は僕の兄弟子だから未だに勝てないだけ……って、魔術だって？ 魔術ってあれだろ？」

「そう。一昨日あんたが見た世界で、死にかけるまで攻撃された奴よ」

灰色ローブの男

実は聖と同じ高校生なのだが、その時攻撃法として使われたのは魔術だった。炎を操り、魔術が使えない聖を苦しめた。

再びトラウマが思い出されそうになったが、グツとその場で押し留めた。

「魔術って、この世界っていうか、現実っていうか
間でしか使えないんじゃないのかい？」

あの空

「そこについての説明はされていないのね。 使えるわよ。
ただし制限がつくけどね」

綾乃がシャツのポケットから出したのは一枚のカード。白いカードには銀色の装飾が施されている。

昨日大胡教師が見せてくれたカードの一枚に似ている。だがそれより装飾が豪華で煌びやかだ。文字が読めた。『レイ・バースト』とあった。

「シルバーブリッツでこのカードを使うことが一番の真価を発揮するんだけど、この現実でも使えることは確かよ。制限っていうのは

発動と効果に追加されるわ。この現実の世界で発動するにはこのカードで発動するってこと。腕輪は必要ないし破らなくてもいい

「こんな感じにね」

聖の前に差し出された綾乃の右手の上には『レイ・バースト』がある。と、次の瞬間にカードが光り出し、そしてカードの上に光の珠を作り出した。

光の珠があまりにも美しく、綺麗だったためにトラウマを思い出さなくて済んだが、驚いて言葉が出なかった。

「これほどじゃないけど、カードの効果 威力がかなり制限されてしまうわね。本来の十分の一ってところかしら。因みに今私が出しているこの珠の出力は百分の一以下ってところかしらね。触っても、暖かいつて感じるくらいね」

「でも何のためにこの現実世界で魔術が使える様になったんだろう」「考えれば解る事よ」

聖の疑問に鼻を鳴らして答える。

その顔はあまり誇らしげではなく、むしろ言いたくない様な表情で絞るようにして言った。

「シルバーブリッツで戦うよりも、現実世界で戦った場合、結局人の力だもの。戦力だけで簡単に制圧できるでしょ。だから一人で百人は制圧できるようにしたの。そうすれば簡単に手は出せなくなるけど条約みたいなものがあってね、ここで魔術を使って攻撃出来るのはシルバーブリッツだけ。一般者は直接攻撃できないわ。けど間接的になら攻撃できるのだけだね。 そうやって汚い手を使う輩がいるから、現実世界でも魔術を使える様にしたんでしょ
うね」

月が似合う少女　？（後書き）

やはり理由もなしに戦いたくない。普通がいい。ただなぜこっちに意識が集中してしまうんだ。無意識的に左腕に巻かれた赤いリストバンド。そしていつの間にかシャツのポケットに入っていたカード『アーツ』が鈍く光った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1373w/>

SILVER BLITZ

2011年10月7日00時21分発行